

礼文・利尻島編年の新検討 — その(2) 亦稚貝塚資料から(1) —

柳澤清一

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町513 早稲田大学総合研究機構 先史考古学研究所

A New Consideration of the Pottery Chronology of Rebun and Rishiri Islands Pt.2-1: With a Central Focus on the Matawakka Shell Mound

Seiichi YANAGISAWA

Institute of Japanese Prehistory, Comprehensive Research Organization of Waseda University,
Nishi-waseda, Shinju-ku, Tokyo, 162-0041 Japan

Abstract. This is a second discussion to reconsider the northern chronological order system in detail using publication and non-publication materials of the Matawakka shell mound, western Rishiri Island, Hokkaido.

はじめに

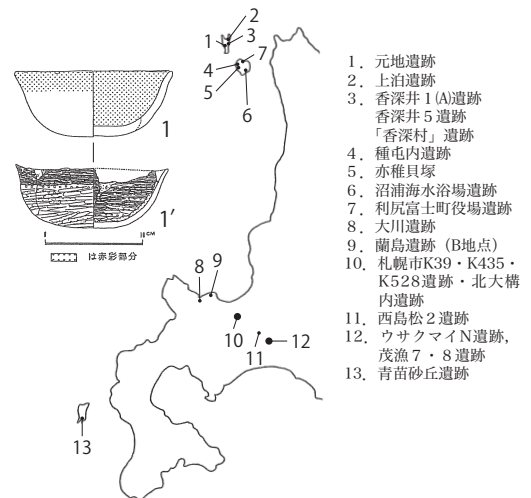
利尻島内の「オホーツク文化」遺跡では、利尻富士町役場遺跡(利尻富士町)や亦稚貝塚(利尻町)の資料が最も注目される。これらを時期的な違いに留意して対比すると、縄文文化期から「オホーツク文化」の終末段階まで、ほぼ連続的な土器変遷が捉えられる。その結果、利尻島内の編年は、通説の礼文島編年(大井, 1972; 熊木, 2000)とは矛盾しないと認識されているようである。

そうした島嶼域編年に対して、前稿(柳澤, 2017)では、香深井5遺跡(礼文島)の未発表資料を再掲し(柳澤, 2011:348-355, 2014b:32-39)、層位・共伴事実や型式学的な分析、B-Tm 降下年代に基づいて、通説を見直した編年案が礼文島・石狩低地帯でも矛盾なく成立することを明らかにした。

本稿では、この準備作業をふまえて利尻島にフィールドを移し、亦稚貝塚の調査成果を斟酌した島嶼域編年の妥当性について、刻紋土器Aとその周辺を対象として年代学的な検討を試みる。ついで石狩低地帯へフィールドを移し、道央(石狩低地帯)から亦稚貝塚と香深井遺跡群の対比編年を交差的に検証したい(第1図)。

1. 問題点の所在

利尻町に所在する亦稚貝塚の発掘調査は、宗谷バスの杓形ターミナル等の改築・整備に伴う緊急調査として、厳しいスケジュールのなか1977年4月に実施され、翌年には、利尻島の「オホーツク文化」を初めて体系的に捉えた報告書が刊行された。稀有のトナカイ角の彫刻製品や海獣紋土器、各遺物ブロックから読み



第1図. 本稿で検討する遺跡と亦稚貝塚の環。

取られた土器変遷観などの成果（岡田・梶田・西谷ほか、1978）は、速やかに研究者の知るところとなり、島嶼域における通説編年の拠りどころとなっている。

報告書によると、亦稚貝塚における「オホーツク文化」の変遷は、土器群の内容（型式）と空間的な位置（地点）の違いをふまえて、

「第1ブロック（A・F・G区）→第2ブロック（N・O区）→第3ブロック（C～E・H～J区）」

という序列で捉えられている（岡田・梶田・西谷ほか、1978：8-11）。

第2図は、各ブロックを代表する資料を抽出し、筆者の分類案（（）内）を加えて作成した亦稚貝塚「オホーツク式土器」の編年図表である。各土器群（「土器セット」）の内容と変遷^{（註1）}は付表によると、

第1ブロック：「円形刺突列・刻文 土師器共伴」
（A・B類、C類?）

第2ブロック：「刻文+沈線 カラフトブタ多」（E類）

第3ブロック：「貼付文・線描文 焼骨をもつ遺構」
（F・G・H・I類）

と整理されている。

「中間の部分」（第2ブロック）に関しては、特に疑問とすべき点は見当たらない。そこで、これはひとまず措き、また、第3ブロックの貼付紋系土器群（H・I類）については、続編で詳しく取り扱うことにして、本論では、未解決の問題を抱える第1ブロックに焦点を当てたい（第2図）。

報告書に掲載された土器群は、大きくA類：十和田式土器、B類：刻紋土器A、C類：横位の刻紋を施すものに分けられる。第1図に示した「坏」は、これらに伴出したという。これは鬼高式（後半）に対比され、「7世紀」を中心とする年代が与えられた。その後、本例はより古いものであるとして、「6世紀末」の「住社式」期に比定する意見も示されている（小野、1998：350-357）。

香深井1(A)遺跡のIV層では、第1ブロックと同様に十和田式系の土器群と刻紋土器Aが伴出しており、「6世紀初頭前後」とされる「土師器」（宇部、2009）も検出されている。こうした出土状況を「共伴」と認め、魚骨層IVの形成は「6世紀初頭前後」から始まると想定されている（天野、1982；小野、

1998）。他方、魚骨層IVの主体をなす刻紋土器Aの年代は、一般に7世紀代とする見解が広く支持されており（右代、1991、2003；中田、2004；熊木、2011）、この相違点は解消されていない。

こうした年代学上の問題点を解消するには、どのような方法を取れば良いのであろうか。試みに、「土師器の年代は土師器から」としておき、刻紋土器Aに関しては、そのキメラ（折衷）土器を用いて他地域と交差的に年代観を検証すれば、第1ブロックA・B類の年代学上の位置は、自ずと明らかになるように思われる。

報告された資料の範囲では、こうした視点からの分析を徹底することは容易でない。旧稿では夙に、基礎工事に伴い表採されたキメラ（折衷）土器（柳澤、2006b：79-83）を用いて、一般に7世紀代とされる刻紋土器Aの年代を9世紀代と考察した（柳澤、2008a：596-632、2014b：42-56、2015b、ほか）。しかしながら、いまだ大方の賛同を得るには至っていない。

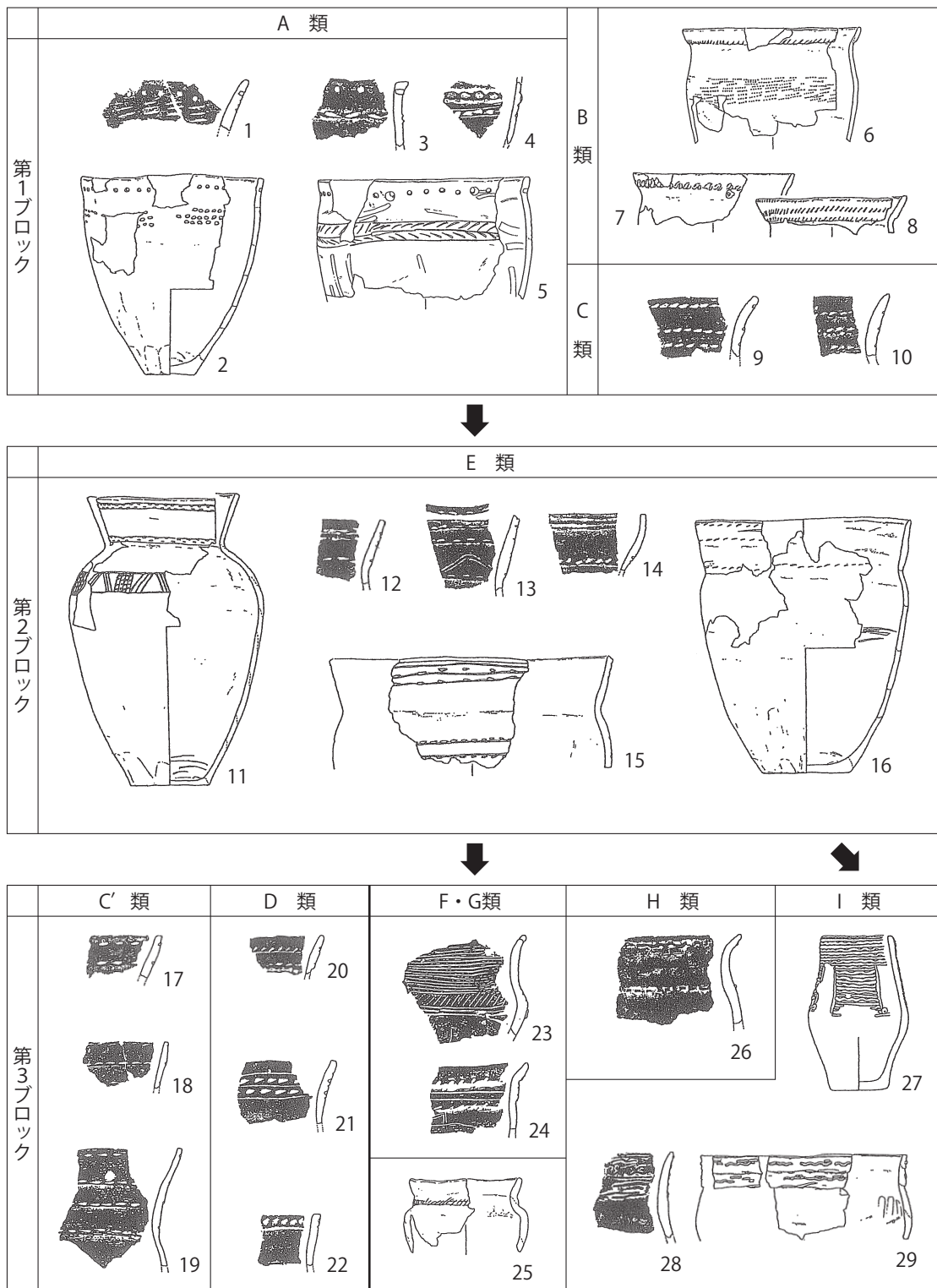
そこで本稿では、亦稚貝塚I・F・G区の土器群を主たる対象として、年代学上の「鍵」となる複数のキメラ（折衷）土器を抽出し、それらの分析と比較を通じて、広域交差編年の観点から、島嶼域における刻紋土器Aの通説的な年代観（「6～7世紀」）の妥当性をあらためて検討したい。

2. 亦稚貝塚と上泊遺跡の「忘失」されたキメラ（折衷）土器

1) 再び、亦稚貝塚の表採資料から

報告書には、復元9点を含む計51点の資料が紹介された。そのうち第3図1・1'例は、夙に旧稿（柳澤、2006b：79-83）、及び前稿（柳澤、2017）で取り上げたものである。2例（柳澤、2009a：102-108）については別資料があるので保留し、ここでは1・1'例を観察したい。これまで寡聞にして、本例に係わる先行研究を知らない。「忘失」されているのか、「香深村」例（柳澤、2017：48）^{（註2）}のように、等閑に附されているのであろう。

まず器形から見よう。口縁部は刻紋土器Aのように肥厚し、頸部は括れる。大きさは口径13.6cm、高さ16.0cm、底径7.6cmを測る。小型土器と認められる。



第2図、亦稚貝塚出土土器群の分類と報告書の編年案 (岡田・相田・西谷ほか編(1978)より編成)。

全体の形状は、一見すると刻紋土器 A の壺形土器に似ている。しかし、香深井 I(A) 遺跡の未発表資料を悉皆的に実査 (2007 ~ 2008 年) した際にも、酷似した例は見当たらなかった。

括れ部より下位では、器厚 10 ~ 12 mm を測る。ずんぐりした中厚手の作りで、重い個体である。色調は全体に赤褐色を呈する。この点も刻紋土器 A とは異なる。報告では、「焼成・整形もオホーツク式土器とは思われない」とあり、頸部の紋様は、「擦文土器を思わせる沈線の斜格子が稚拙に描かれ、その頂点に小さな円形が印されている」と正確に指摘されている (北風, 1978 : 71)。

この記述で注目されるのは、同じ斜格子紋でも、1 例のそれは擦紋土器に由来し、一般に 7 ~ 8 世紀代とされる「北大Ⅲ式」には対比していないことである。

それでは、その「擦紋土器」とは、どのようなものを指すのであろうか。誰もが認める「擦紋土器」では、1 例のように斜格子紋を口頸部に幅広く施すのは 9 世紀の中頃以降と考えられる (柳澤, 2017)。この年代観は、第 1 ブロックを 6 ~ 7 世紀代とする先行研究の見解とは、2 ~ 3 世紀もの隔たりがある。したがって表採資料ではあるが、1 例の観察と比較、年代の検討を疎かするわけには行かない。

そこで、本例に類似した厚手の器形を探索すると、礼文島上泊遺跡の 21 例が目にとまる。これは元地式の「古い部分」(元地 I 式 : 柳澤, 2012a, 2013 : 168-175) に比定されるが、高さ 11cm, 口径 9.4cm を測る。底部は 1 例と同様に外張りしている。一見して、全体の形状はよく似ていると言える。口縁部を刻紋土器 A のように肥厚させ、内底面を薄く仕上げれば、1 例に酷似した器体となる。

そこで他の資料を参照すると、1 例と同様の円形刺突に連繋弧線紋を加える 18 例が注意される。また口縁部の上下に、円形刺突紋を間欠的に加えた 19 例や、厚手ながら擦紋Ⅱの横走沈線紋を持つ 20 例のキメラ (折衷) 土器が目にとまる。これらから 1 例と上泊資料、擦紋土器Ⅱ (佐藤, 1972) の間には密接な関係があると解されよう。

上泊遺跡の南方に位置する香深井 I(A) 遺跡にも、口縁部や頸部、胴部に円形刺突紋を施した 3 ~ 5 例

(魚骨層Ⅳ) や、6 例 (魚骨層Ⅲ) ・ 7 例 (間層Ⅲ / Ⅳ) が出土しており、刻紋土器 A が伴出している。

さらに 1 例の胴部に見える三角紋であるが、これは擦紋Ⅱに由来するものである。また円形刺突紋帯は、香深井 5 遺跡の 17 例に酷似しており、時期的には、16 例の刻紋土器 A に近いと考えられる (柳澤, 2017 : 52-53)。

他方、道央のウサクマイ N 遺跡 (千歳市) には、この円形刺突紋帯を擦紋Ⅱの胴部に施した 8 ・ 9 例が存在する。これに後続する末広遺跡 (千歳市) の IH-28 号資料 (13) には、口縁部に「截痕」を持つ 12 例が伴う。香深井 I(A) 遺跡の刻紋土器 A にも、擦紋Ⅱと酷似した「截痕」を施す 14 例が魚骨層Ⅳで検出されている。これは 2 例の「截痕」に酷似すると言えよう。

さらに、14 例とほぼ同時期の 15 例、香深井 5 遺跡の 17 例 (≒ 16) の口唇部には、北大式系の浅い凹溝 (凹線紋) が認められる。同じものは、道央の擦紋Ⅱや変容土師器 (11) に盛行しており、島嶼域と道央の交流を示唆する要素として注目される (柳澤, 2014b : 25-39, ほか)。

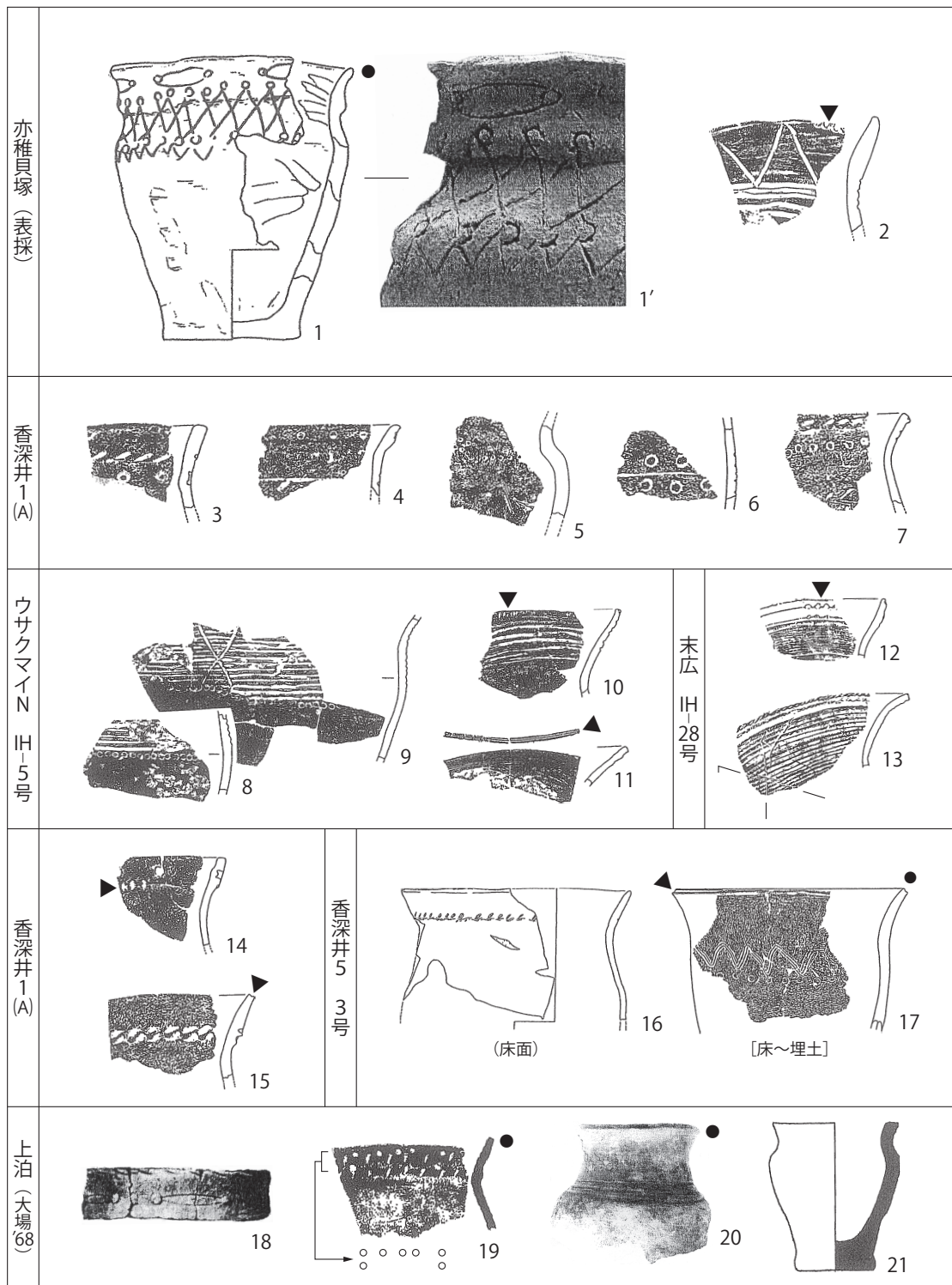
以上の観察によると、1 例の土器は器形が元地 I 式系で、口縁部が刻紋土器 A 系、胴部の斜格子紋が擦紋Ⅱ系と捉えられることになり、異系統土器の接触に由来する「キメラ (折衷) 土器」であると、あらためて認められよう。

2) 上泊遺跡の隠れたキメラ (折衷) 土器

この遺跡の資料は網羅的に公表されていないので、詳細な検討は難しい。第 4 図 6 ~ 8 例については、すでにキメラ (折衷) 土器の一例であると指摘している (柳澤, 2014a, ほか)。繰り返しになるが、亦稚貝塚第 1 ブロック資料との関係性について、少しく検討してみたい。

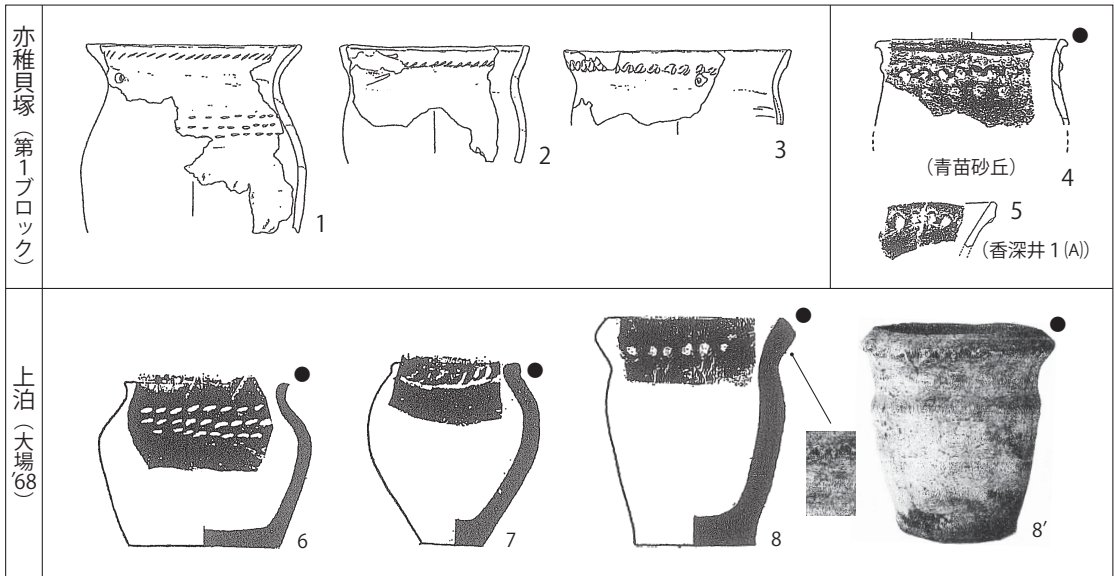
元地式の古いものには、固有の装飾要素が乏しいように思われる。主体を占めるのは常に無紋土器であって、紋様を施したものの大半は、擦紋Ⅱや刻紋土器 A、あるいは先行諸型式からの間接的な影響 (「先祖返り」) を反映していると考えられる。

さて図示した 6 ~ 8 例は、いずれも小型土器に属する。高さは 7 ~ 11cm, 口径は 5 ~ 8cm を測る。6 例は、



●キメラ (折衷) 土器/模倣土器 ▼凹溝/截痕 (以下, 共通)

第3図. 亦稚貝塚の表採されたキメラ (折衷) 土器と礼文島・石狩低地帯資料の対比.



第4図. 亦稚貝塚の刻紋土器 A と道南（奥尻島）・島嶼域（礼文島）資料の対比。

「オホーツク式土器」のように底部が幅広く、器壁は薄い。底径と口径はほぼ等しく、口頸部が特徴的に窄まる。

器形の特徴をみると、類似する例は「オホーツク式土器」には見当たらず、元地式の完形品の中に良く似た例（大場，1968：第7図16）が見いだされる。肩部に施された3列の刻紋帯は、亦稚貝塚の1例と酷似しており、そうしたものから借用したと考えられる。

このように観察すると、6例は元地式の器形を母体としているが、刻紋土器 A のように器体をやや薄手に作り直し、胴部の装飾要素を模倣したものと捉えられる。明らかに、元地1式と刻紋土器 A のキメラ（折衷）土器と言えよう。

他方、7例と8例はともに厚手の作りであり、容易に元地1式と認められる。ただし、双方の口縁部装飾は、亦稚貝塚の2・3例（=4例）^{（註3）}と酷似しており、それを借用（模倣転写）していると考えられる。

そのとおりならば、1～3例や先に引用した横走沈線紋の厚手土器（第3図20）などは、いずれも元地1式と擦紋Ⅱ、刻紋土器 A の接触と交流に伴うキメラ（折衷）土器であると、あらためて認められよう。

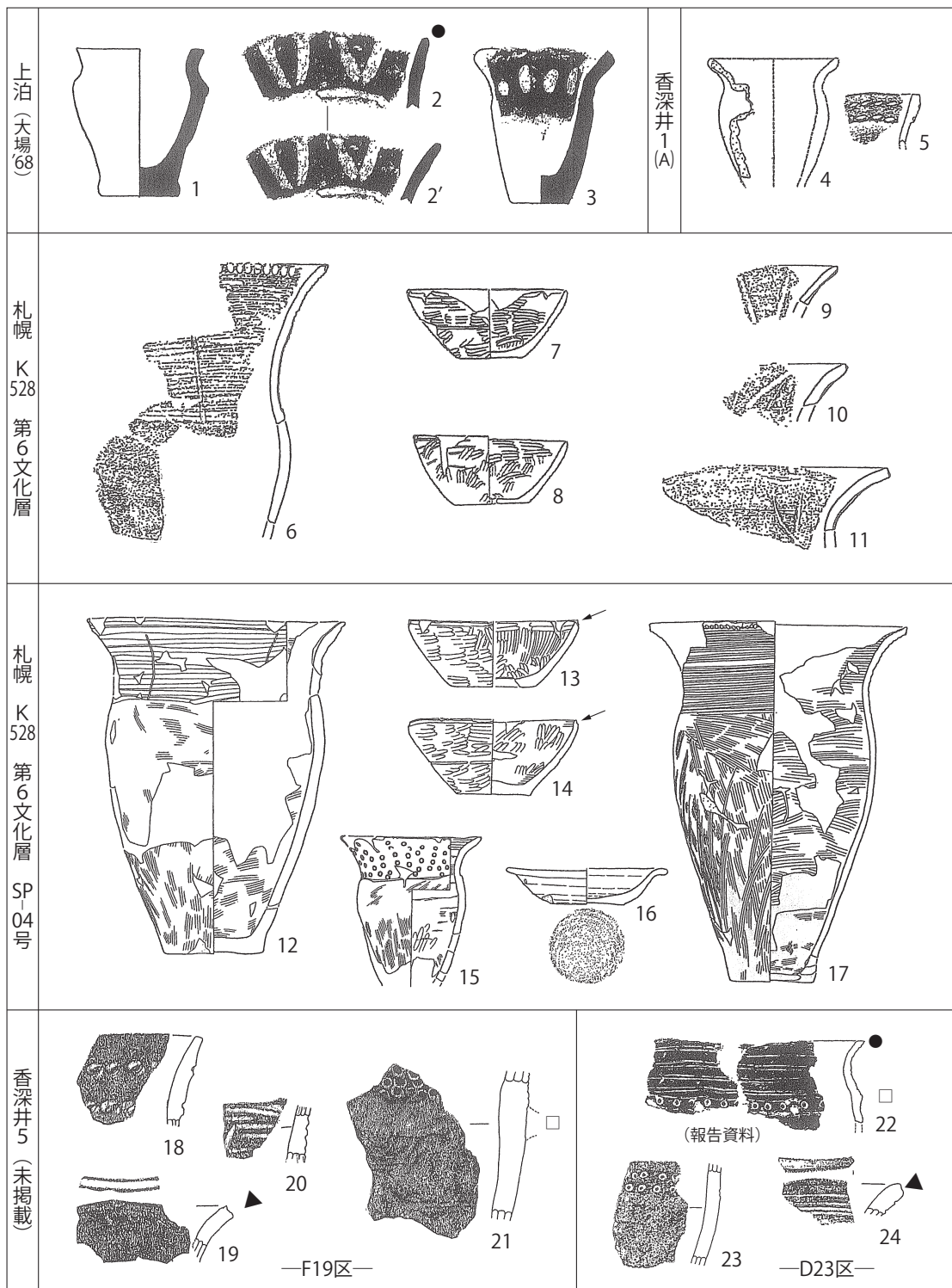
3) 上泊遺跡の特異な指押紋から

指押しによる太い凹線で装飾紋を施す手法は、元地式において創出されたと考えられる（第5図）。その例としては、旧稿で触れた大波状沈線紋や楕円状の凹線紋（3）が挙げられる（柳澤，2012a，2013：175-120図，ほか）。

その他に2例に見える「V」字形の凹線紋がある。拓本の上縁が弧を描くので、器体は2'例のように朝顔形に外反するであろう。今のところ、厚手の類例は上泊遺跡のみで知られている。しかし広域的に類例を求めると、意外なことに、石狩低地帯の擦紋Ⅱを伴う「擦文前期」土器群に見いだされる。

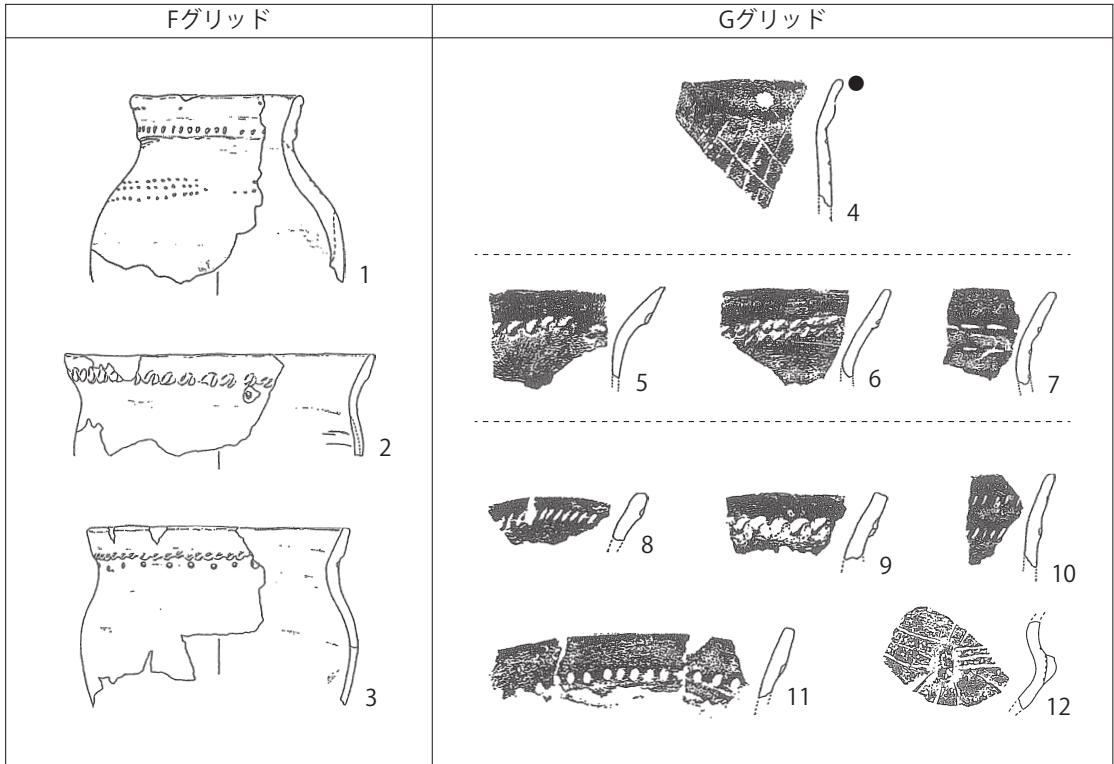
K528遺跡第6文化層の9～11例である。いずれも朝顔形に外反する甕形土器であり、その口頸部にはへらで鋭い「V」字状のモチーフが上泊遺跡例と同様に間欠的に施されている。施紋具の違いはあるが、双方のモチーフは酷似していると、一見して認められるであろう。

これらには、一般に9世紀代とされる坏（7・8）と、擦紋Ⅱの6例が伴って出土している。それに近似する例は、SP-04号竪穴住居址（以下、竪穴）から、12～17として検出されている。坏には、口端部に明瞭な沈線（←印）が加えられている。また、甕形土器15例の口頸部には、円形刺突紋が幅広く施されている。



←沈線 □突帯

第5図. 礼文島の元地I式と石狩低地帯の横走沈線紋土器群 (擦紋II) の交差対比.



第6図. 亦稚貝塚第1ブロック出土の刻紋土器Aとキメラの斜格子紋土器.

それに酷似するものは、香深井5遺跡のF19区において、刻紋土器A(18)や擦紋II(19=20)とともに、21例として層的に検出されている。これには突帯の痕跡が見られる。D23区でも突帯に円形刺突文、口頸部に横走沈線紋(6・12)を施した22例(柳澤, 2007, 2008a:第121図)が、23例(←第6図1)・24例(≒20)に伴って出土している。これらは同じ層準のものであり、時期的にはごく近接すると考えられる。

15例に見える円形刺突紋(≒21例)は、擦紋土器ではごく稀な装飾であって、島嶼域からの影響を示している。それに対して9~11例に見える「V」字状のモチーフは、逆に石狩低地帯から島嶼域(上泊遺跡)に向かって擦紋IIの時期に波及したと考えられる。他方、3例の楕円状の凹線紋は、香深井1(A)遺跡の魚骨層IIIにおいて、刻紋土器A末?に伴出した厚手の完形品に施されている。これは元地1式が搬入されているか、その影響を刻紋土器A(5)の側が受けていることを、端的に示していると言えよう(柳澤, 2013: 174-175, ほか)。

3. 亦稚貝塚のキメラ(折衷)土器の位置

亦稚貝塚には表採品でなく、発掘された複数のキメラ(折衷)土器がある。未掲載の例も参照した場合、亦稚貝塚をめぐる通説編年は、どのように変化するであろうか。

1) 第1ブロックのキメラ(折衷)土器(第6図)

刻紋土器Aと擦紋IIの接触に伴うキメラ(折衷)土器の4例は、Gグリッドの茶褐色土層(G74)で検出されている。この区域の層序は、断面図に「2層→3A層→3B層→5層」とある。第1ブロックの項では、2層:「黒色土層」、3層:魚骨・ウニ・焼土などを含む互層、5層:茶褐色土層と説明されている。また、清書された遺物台帳では、つぎのように記載されている。

- (1) G72(4月21日):茶褐色土層
- (2) G73(4月21日):茶褐色土層+骨(5~7)
- (3) G74(4月23日):茶褐色土層(4)
- (4) G75(4月23日):魚骨層(8~12)

以下は、東壁セクションとの対比を示したものである。

- (1) 「黒色土」・・・・・・(2層)
- (2) 「暗茶褐色土」・・・・・・(?層)
- (3) 「魚骨」・・・・・・(3A/B層)
- (4) 「魚骨茶褐色土」・・・・(3A/B層)
- (5) 「茶褐色土」・・・・・・(5層)

層位情報はこのように細部に異なるが、4例の斜格子紋土器(G74)は、G73・75間で出土したと捉えても大過ないであろう。これらの層準では、十和田式の復元資料の他に刻紋土器Aの破片資料(5～7, 8～12)も出土している。いずれも、隣接するFグリッドの完形品(1～3)と同時期に比定されるものである。

なお冒頭で触れた、6～7世紀代とされる「坏」(第1図1・1')は、「円形刺突文」の十和田式に伴い(岡田・相田・西谷ほか, 1978:100), Fグリッドを中心に出土している。一般的には、刻紋土器Aも「坏」に共伴すると見做されている。しかし4例の斜格子紋土器には、6～7世紀代の特徴は見当たらない。少し観察してみよう。軽く肥厚した口縁部は「北大式」ではなく、刻紋土器Aに由来するものである。口縁部の無紋扱いは異化操作であろう。頸部以下には斜格子紋が施される。その頂点は鋭角をなすか、又は交差している。先のキメラ(折衷)土器(第3図1)と比べると、紋様の構成はやや粗雑に見える。横走沈線紋を欠いており、斜格子紋は「左斜線→右斜線」の順に引かれている。こうした特徴からだけで、4例がどの刻紋土器Aに伴うのか判断するのは難しい。しかし、礼文島資料の分析をふまえると、両者は時期的に近接し、擦紋II式と並行すると捉えられよう(柳澤, 2017)。

2) 知られざる第3ブロックのキメラ(折衷)土器

このブロックは第1ブロックの西側に当たり、C・H区、D・I区、(E)・J区にかけて広がる。トナカイ角製品や海獣紋土器が検出された焼骨遺構は、H区を中心とし、I区とC区の一部で確認されている。I区とD区では、鈴谷式期の堅穴床面に至るまで、遺物が層位的に検出されており、その経過は遺物台帳に記されている。

第7図2・4例のキメラ(折衷)土器は、I区の「黒色砂層」(I42)より検出されている。この層準からは量の多寡はあるが、多様な土器が出土している。掲載

資料で層位の分かるものを示すと、12・15～22例が挙げられる。それに対して1～11例は、未掲載とされた資料である^(註4)。特徴によって大まかに(1)～(6)類に細分される。いずれも清書された遺物台帳に「I42」(4月26日、「黒色砂層」と記載されている。



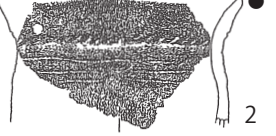



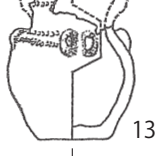










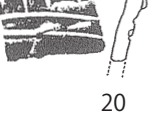


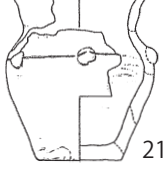

右列と左列の比較から特に注意されるのは、報告書に見当たらない(2)類(2～5)と(5)類(10・11:元地2式)である。後者については、I41(黒色土層)の土器群とともに、あらためて検討する予定である。ここでは未発表のキメラ(折衷)土器に注目したい。

2例は、甕形土器の大きな破片である。復元では口径17.8cm、現存高9.5cmを測る。口縁部には斜位の刻紋、括れ部に3本の浅い横走沈線紋を施す。胎土・焼成・調整は「オホーツク式」系であるが、横走沈線紋は擦紋IIに由来する要素である。4例は、新たに接合したものである^(註5)。頸部径13.4cm、現存高5.8cmを測る。括れ部に3本の明瞭な横走沈線紋を引き、それを斜線で切り込み斜格子紋を構成している。頂点は鋭角に結ばれない。第1～2線にかけて、刻紋土器A(13・14=第6図12)に由来するポッチが付けられている。胎土・焼成・調整は「オホーツク式」的で、「北大式」的な特徴は認められない。

以上の観察から、両例は刻紋土器Aと擦紋IIの接触に伴うキメラ(折衷)土器であると認められよう。2例と3例の刻紋は古いタイプに属する。5例の爪形紋は、それより新しいと考えられる。2例は横走沈線紋(=第3図20, 第5図22)のみであるが、4例では横走沈線・斜格子紋・ポッチを施す。この違いを時期差と捉えれば、キメラ(折衷)土器には、「2例=3例→4例=5例=第6図12」、という変遷が想定できるであろう。

3) 見落とされた香深井I(A)遺跡の斜格子紋土器

亦稚貝塚のキメラ(折衷)土器については、以上のとおりに観察された。礼文島にも、それらと対比されるキメラ(折衷)土器がある。戦前に紹介された「香深村」例である。これは旧稿と前稿(柳澤, 2014a・b:26-32, 2017, ほか)で検討し、一致した所見を得ている。もう一つは、香深井I(A)遺跡1号c堅穴の第8図7例である。これも旧稿(柳澤, 2006b,

	未掲載の資料	報告された資料
(1) 類	 1	 12
(2) 類	 2  3  4  5	<p>—参照 香深井 1 (A)遺跡—</p>  13 <p>1号c竪穴 (埋土)</p>  14 <p>間層Ⅲ/Ⅳ</p>
(3) 類	 6  7	 15  16
(4) 類	 8  9	 17  18  19  20
(5) 類	 10  11	 21  22

■ : 欠落している部分

第7図. 亦稚貝塚第3ブロックI区 (I42:「黒色砂層」)の土器群 (抄録).

2008a) で検討しているが、大方の理解を得ていない。そこで資料を補って検討したい。報告書の記載は簡単で、擦紋土器については触れていない(大井・大場, 1976: 688)。

(1) 7例は、「3条の横罫する沈線の間を斜格子文で埋めた」ものである。

(2) このように胴部文様帯を有する例は、刻紋土器Aに富む「魚骨層Ⅲなど」と同様に、「かなり発見されている。」

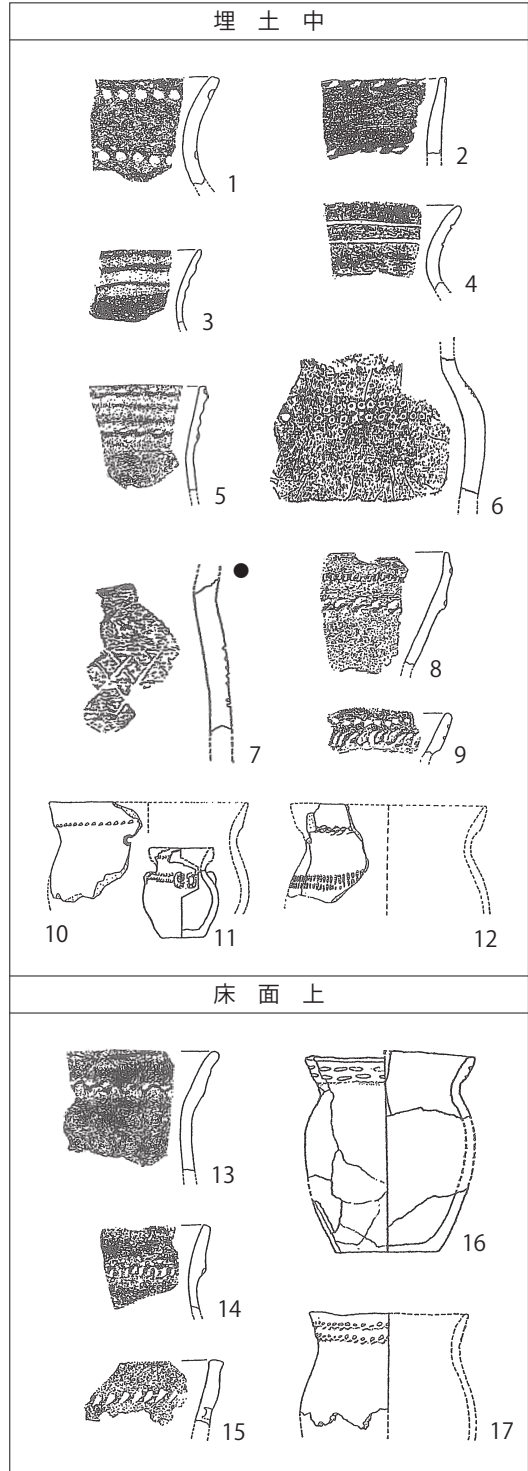
それでは7例のように、誰もが認める「擦文土器」(擦紋Ⅱ)の胴部紋様を折衷した土器が、なぜ、魚骨層Ⅰから1号b 堅穴に至る堆積層の下から、二つの「床面」にパックされて出土したのであろうか。これは紛れもない層位事実であるから、それが意味するところを、十分に検討してみる必要があるであろう。

1号c 堅穴の床面上と埋土中では、多様な土器が出土している。相対的には、床面上により古いものが多く(14・15 → 13 → 17, → 16), 埋土中では、それと同時期のものに加えて(10・11 → 12), より新しいもの(8・9 → 1~5)が目立つ。後者のうち1・2・4例は、古式の摩擦式浮紋を伴うので、刻紋・沈線紋土器の「古い部分」(擦紋Ⅲ(古)並行)に比定される。その時期の道央では、7例のごとく、3~4本の横走沈線紋帯を切り込んで構成された斜格子紋の実例は、きわめて稀な存在である(末広遺跡 IH-76号土器群: 大谷・田村, 1982)。

他方10~12例の時期は、床面上の古い土器(13~15)と変わらない。8・9例(≒6)は新しく、16・17例に並ぶと考えられる。このように観察すると、通説では「忘失」された7例のキメラ(折衷)土器は、8・9例か10~12例のいずれかに伴う可能性が改めて想定されよう。

4. 石狩低地帯の「斜格子紋土器」と「刻紋土器A」の位置

島嶼域では、刻紋土器Aと元地Ⅰ式、擦紋Ⅱとの間で接触と交流があり、その結果、系統母体を異にしたキメラ(折衷)土器が作られたことは、以上の分析で明らかになった。しかし、そのような見方は、道央においても矛盾なく成立するであろうか。



第8図. 香深井1(A)遺跡. 1号c 堅穴出土の土器群。

1) 茂漁8遺跡の斜格子紋土器について

千歳市の茂漁遺跡では、刻紋土器Aの完形品が墓壇らしき遺構を伴う試掘区から発見されている(第11図6)。報告書(森, 2004:147-148)では、これを「8世紀初め位」に比定している。しかし、その年代は遙かに降るのではなからうか。その点は後節で検討すると、先ずは、島嶼域-道央編年の「鍵」となる斜格子紋土器を取り上げたい(第9図)。

1例は、茂漁8遺跡H-10号堅穴の覆土から検出された未掲載の斜格子紋土器である^(註6)。口縁部は軽く内傾し、幅狭い素紋帯を形作る。その下に鈍い凹線で横走沈線紋を幅広く施し、さらに同じ凹線で大きな斜格子紋を描く。横走沈線紋の間隔が広いこと、描線が段状でなく鈍い凹溝をなすこと、そして斜格子紋が口縁部から直接に垂下することなどは、本例の特徴として注目される。

そこで島嶼域の斜格子紋土器と比べると、亦稚貝塚の2例や香深井1(A)遺跡の4例が目に残る。3~4本の鋭い横走沈線紋をめぐらし、それに斜格子紋を加えている。ポッチの有無と器形の特徴が異なる。しかし頸部を無紋扱いする点は共通する。他方、茂漁8遺跡の1例(擦紋II)は、斜格子紋を幅広く施すが、口頸部を無紋扱わない。これは道央の斜格子紋土器一般の規範に沿っており、双方の大きな相違点として注目される。

しかし島嶼域には、幅広く斜格子紋を構成する「香深村」例(柳澤, 2017)がある。これを模倣系の「道央系タイプ」とすると、2・4例などは、島嶼域で異化操作された「島嶼系タイプ」として区別できるであろう。口頸部を無紋扱いするのは、母体である刻紋土器Aの形制に由来すると考えられる。例えば3・5例に見える頸部の扱いが参考になるであろう。2例に見えるポッチは、亦稚貝塚(第6図12)や利尻富士町役場遺跡(第9図3)でも出土しており、刻紋土器Aからの転写は容易に想定されよう。

つぎに、下段に示した道央の土器変遷を参照して、キメラ(折衷)土器の年代を間接的に探ってみよう。石狩低地帯では、北奥から波及した土師器((A):14~16)が、しだいに変化し((B):17~19)、土着化して「変容土師器」((C):20~22)となり、やが

て擦紋IIを伴う土器群((D):23・24)へと移行する様子が観察される。図示した資料では、その年代は、(A)・(B)が「8世紀中葉~後葉」(塚本, 2007)、(C)が「9世紀初頭~中葉」(佐藤・土肥, 2010)とされる。それに後続し、島嶼域と関係する(D)は、「9世紀代」に比定されている(塚本, 2007)。

他方、北大式系の擦紋土器(佐藤, 1972)の変遷に関しては、塚本氏の考案によると、「(a):9例→(b):10例+11例(坏)→(c):12例+(坏)」と把握され、その年代は、8世紀の中葉から後葉に比定されるという。試みに1世紀を前・中・後葉に三分すると、各標本例の年代は、それぞれ[]内に示した数値となる。

(c)段階の坏には、口端部に沈線(←)が施されている。土師器系組列の(A)~(C)(8~9世紀中葉)には、そのような例は見当たらないが、9世紀中頃以降の24例では沈線を持つ23例が伴出している。したがって、北大式系の擦紋土器(c)(12=13)の位置は、「8世紀末~9世紀初頭」の変容土師器(20~22)の直後、後続する擦紋II(24=23)の直前に挿入される。また、1例と24例の斜格子紋を比べると、型式学的には24例(9世紀中頃)→1例と捉えられる。

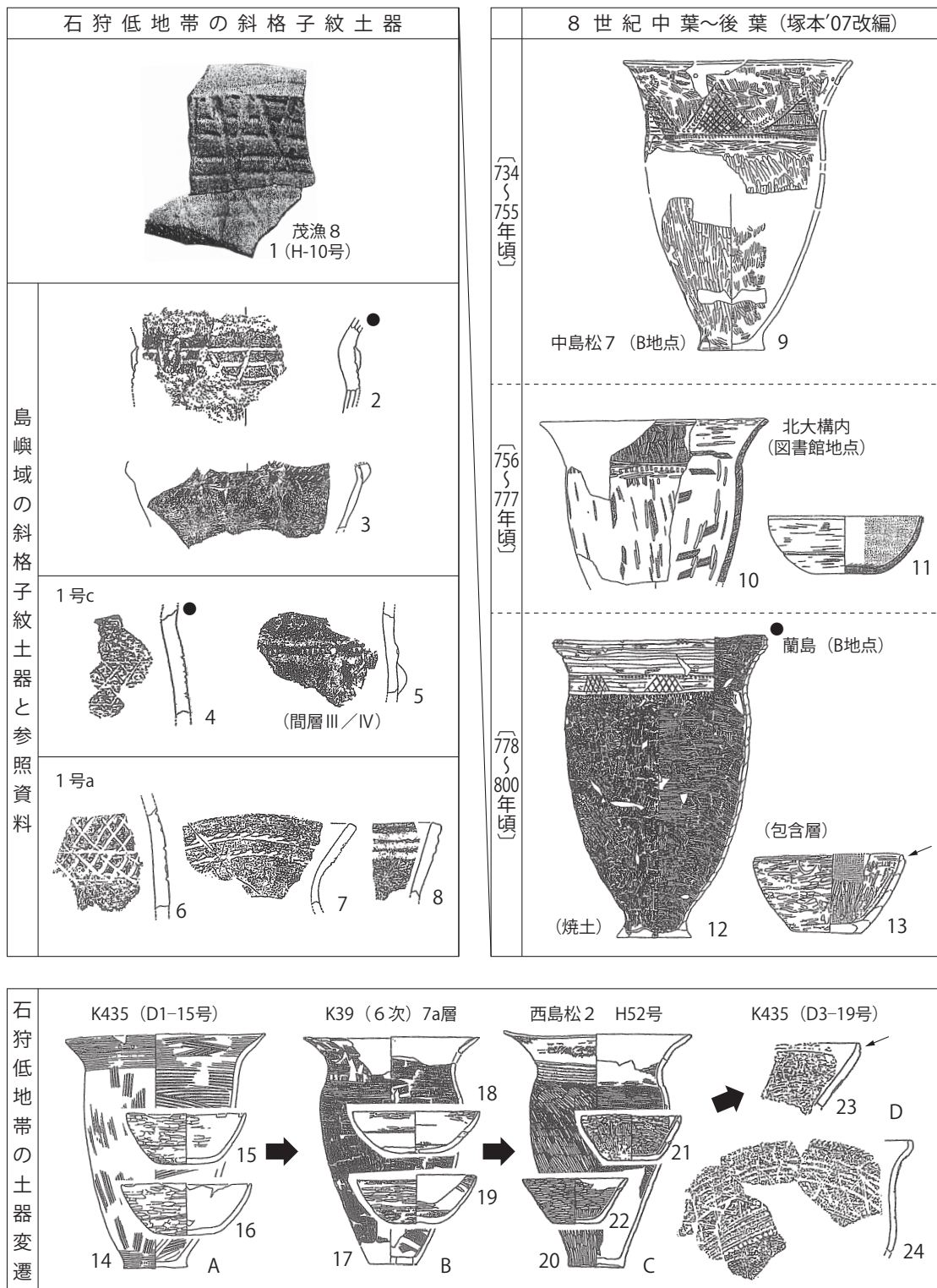
以上の観察から、「蘭島遺跡B地点(12・13:8世紀末葉~)→茂漁8遺跡(1:9世紀中頃~)、島嶼域の斜格子紋キメラ(折衷)土器(2・4:9世紀中頃~)」という編年が仮設される。そして、先に触れた香深井1(A)遺跡1号c堅穴例(4)に後続する、1号b堅穴の複段斜格子紋の土器(6=7・8)は、床面を挟んで4例(≒2・3・5)に層位的に接続すると編年されるわけである。

2) 茂漁8遺跡H-10号出土資料の検討

この堅穴では、床面から丸底の坏と小さな甕片が出土している(第10図1・2)。覆土では、9例の甕片と12例のロクロ調整、ヘラ切りの須恵器坏が報告されている。

その他に、未報告の資料(3~8, 11)があり、斜格子紋土器の11例は、その中に含まれていたものである。

甕形土器は横走沈線紋に注意すると、図示したように細分され、大まかに古い部分(3~6)、中位の部



第9図. 通説編年から見た茂漁8遺跡出土の斜格子紋土器 (未掲載) とその年代.

分(7~9),新しい部分(10・11)に区別される。前二者はE11区に4点,D10・11区で各1点が出土している。それに対し,新しい部分の2点はD11区に限定される。したがって古い部分はE11区に,中位の部分はE11~D10区に,新しい部分はD11区に分布の中心があると推定される。これは廃棄方向や時期の違いを反映していると思われる(覆土(1)類→(2)類→(3)類)。

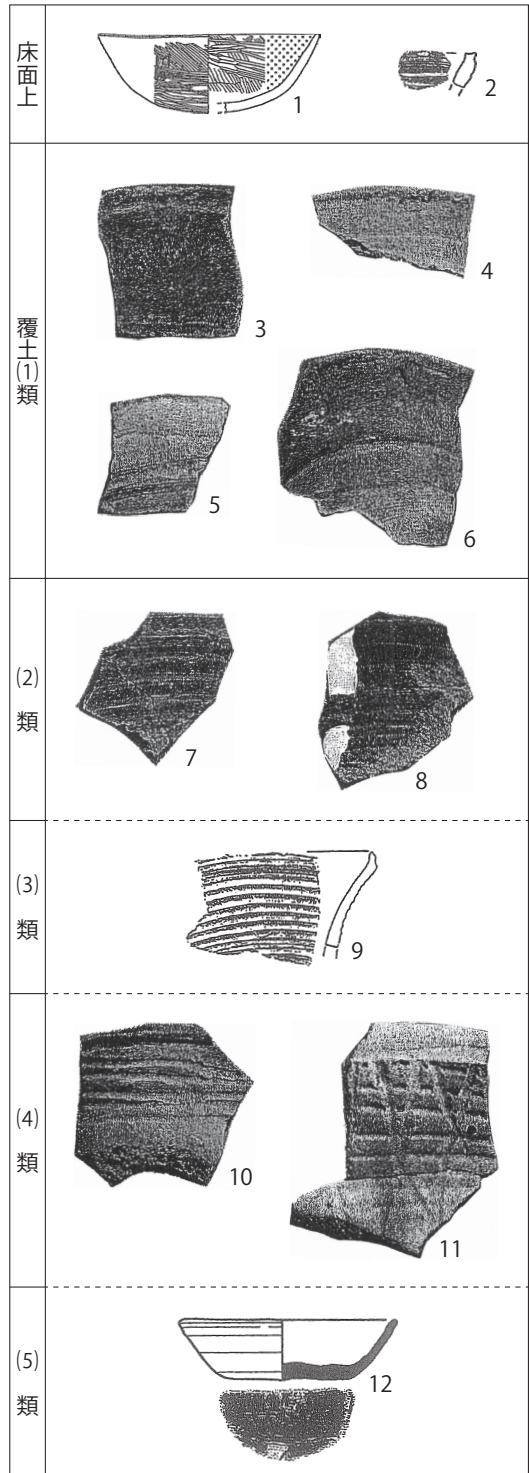
(4)類とした凹線状の横走沈線紋を間欠的に施す10例及び11の類例は,8世紀代とされる甕形土器(3~8)には知られていない。一般に,9世紀とされる土器群において,初めて登場するものと考えられる。他方,ロクロ調整の須恵器坏は,日本海ルートの場合,8世紀中葉~9世紀前葉に比定されている(宇部,2011)。両者の年代が略対応することから,11例の斜格子紋土器は,覆土の(1)~(3)類ではなく,(4)類の凹線を懸け継ぐ10例か,幅広く並行する11例の,どちらかに伴うと想定される。

須恵器坏の大きさは口径13.0cm,高さ3.5cmを測る。9世紀後半のロクロ製坏とは,法量・形態を異にしている。したがって,12例はこれらに先行し,報告書の記載(森,2004:図58)どおり9世紀前半(柳澤,2009a:110・132;9世紀代,註4参照)に比定されよう。

3) 茂漁8遺跡の試掘堀資料と刻紋土器Aの検討

旧稿で繰り返し取り上げている(柳澤,2011:304-307,2014a:7-11,ほか)が,本遺跡では試掘の際に刻紋土器Aの壺形土器(第11図6)が破片資料(1~5)とともに検出されている。本調査では,試掘堀と重複してP-17が検出されたが,その際に出土した資料は報告されていない。未報告であった試掘資料のうち,実査した甕形土器片は,横走沈線紋の違いから三つに細分される。

- (1) 朝顔形に外反する器形で,括れ部に数条の段状沈線をめぐらす。口端部には,ナデによる稜線を数条施す(1~3)。
- (2) 朝顔形に外反し,浅く段状を呈する横走沈線紋を口頸部に幅広く施すもの(4)
- (3) 口頸部がやや強く括れ,口縁部が立ち上がる。



第10図. 茂漁8遺跡 H-10号の出土土器。

口頸部には太めの沈線紋を幅広く、懸け継いで
施し、(1)・(2)類に見えるハケメを欠く(5)

(1)類は、一般に8世紀代とされている。(2)類は、
それに後続するので、8世紀末～9世紀の前葉に収ま
るであろう。(3)類は、それよりも新しく、9世紀の中
頃以降に位置すると思われる。いずれもP-17に伴うも
のではなく、その構築の際に第Ⅲ層(包含層)が切り
込まれたため、二次的に混入・混在したものと推定さ
れる。

一方、6例の刻紋土器Aは、大きな石を伴う墳墓
と推定されるP-17に伴うと推定される(柳澤:前掲)。
器形・紋様帯は島嶼域の刻紋土器Aに良く似ている。
しかし細部の特徴では明らかに異なる。底部の厚さ、
立ち上げ、内底面の仕上げ、外張る形状、ヘラミガキ
手法などは、擦紋的な特徴を示している。したがって
模倣的に制作(中田, 2004)された「オホーツク式」
系の土器と認められよう。

新旧の序列としては、土壙が上層から包含層を切り
込んで構築されているならば、甕形土器の(1)・(2)類、
そして(3)類よりも、完形品の刻紋土器Aが新しいと
言えよう。本例は刻紋土器Aの末期に属するので、お
そらく9世紀中頃の5例に後続し、年代は末葉まで降
ると推定される。香深井1(A)遺跡で検索すると、1号
a 堅穴の資料(第9図6～8)の直前段階に当たると
思われる。そのとおりであれば、これは擦紋Ⅱに並行す
る斜格子紋土器の下限年代を示唆する所見として、あ
らためて注目されよう。

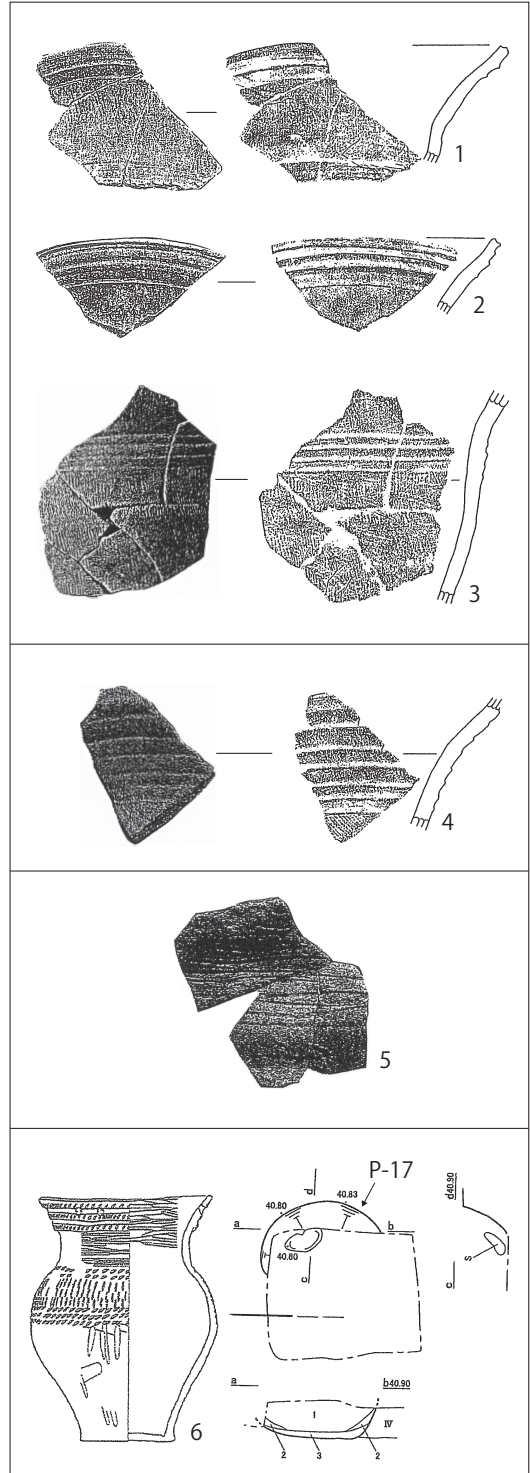
ところで6例の胴部紋様に注目したい。この部位に3
～4本の横走沈線を引き、斜格子紋とポッチを施すと、
先に検討した亦稚貝塚のキメラ(折衷)土器(第9図2)
とそっくりになる。これは偶然の空似なのであろうか。

5. 9世紀代における道央 - 島嶼域の交差編年

ここでは仮設した島嶼域と道央の編年案を、あら
ためて具体的に対比できるかどうか、検証してみよう。

1) 横走沈線紋の変遷から斜格子・「X」字状紋へ

先に道央(石狩低地帯)に分布する土師器系土器
群から擦紋Ⅱを伴う段階に至るプロセスを検討し(第
9図下段14～22→23・24)、そのC・D期間に蘭



1～5 (未掲載)

第11図. 茂漁8遺跡試掘墳の出土土器。

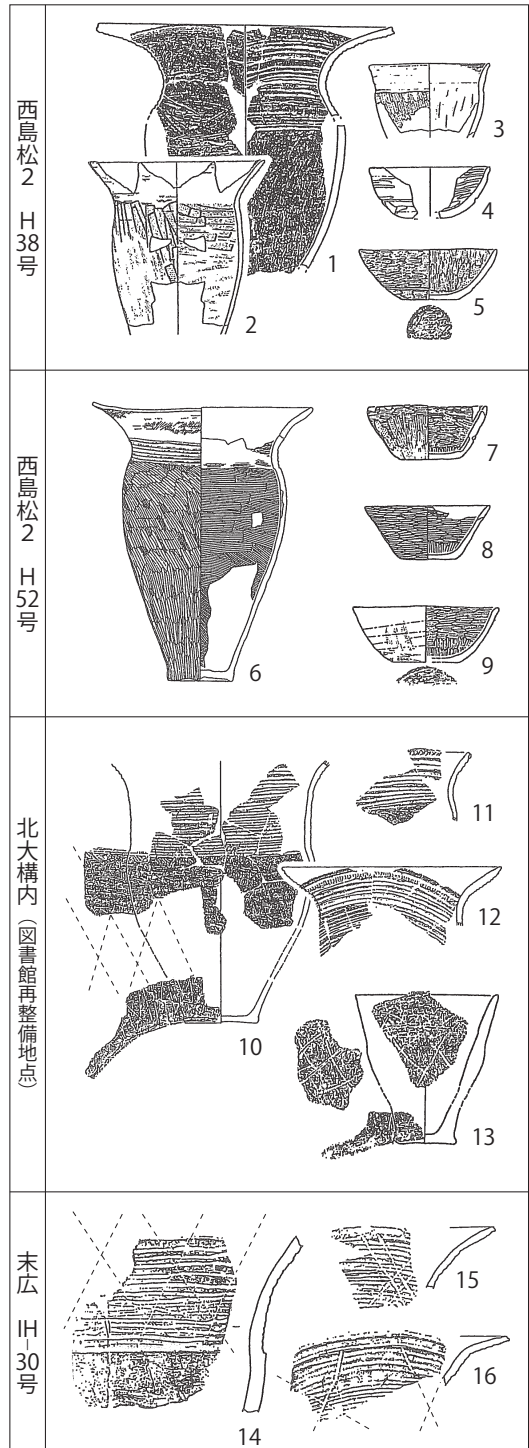
島遺跡の古い擦紋土器(12)と坏(13)を位置づけた。蘭島遺跡12例の紋様帯は、北大式の新しいもの(柳澤, 2006b: 55-64)のように幅広く構成し、段状の横走沈線紋を施している。口端部には截痕, 括れ部には連続と不連続の刻点紋列を施し, その内側に山形の斜格子紋を間欠的に描いている。これは後に盛行する斜格子紋のルーツとして注目されるが, 蘭島例がどのように変遷するのか, 詳細は明らかでない(柳澤, 2008a: 596-613)。

そこで, 土師器系第3期(第12図6~9:「9世紀初頭~中葉」)以降の資料に注目したい。北大構内遺跡の10~13例は, 近年では最も纏まった擦紋IIの資料である。まず10例に注目しよう。本例は西島松2遺跡1例の系列に属し, H52号段階を経て括れと外反が弱まり登場したと考えられる。胴部下半には, 細い沈線で北大式にルーツを持つ大きな斜格子紋が施される。

12例の口端部に見える刻み目帯も, おそらく北大式に由来する分節・分帯手法に由来すると考えられる。

13例には, 大きな斜格子紋が幅広く構成される。別遺跡には, 胴部下半に斜格子紋を持つ10・13例に先行する土器がある。その前後の資料が増えれば, 蘭島遺跡群や中島松遺跡から北大構内資料に至る斜格子・「X」紋字状紋土器の変遷が細かく迎れるようになるであろう(柳澤, 2006b: 47-65, 2008a: 596-613, 2011: 314-316)。

札幌から千歳市へ低地帯を東へ移動すると, 西島松2遺跡に後続し, 9世紀の中頃以降に比定される良好な資料に出会う。例えば末広遺跡の14~16例である。これは段状の横走沈線紋を口頸部にめぐらし, 大きな斜格子紋や「X」字状紋を描く。それを胴部下半に施す例は見当たらない。これは時期差を示す違いであろう。描かれたモチーフは描線が弱く浅いもの(14), やや明瞭に引くもの(15・16)の二者がある。相対的にみると, 前者から後者への変化が推定される。14例の括れ部に見える段状の作出は, 擦紋IIの限られた段階まで見られる特徴として注目しておきたい。以上の観察から, 1例:「8世紀後半~9世紀初頭」, 中間の時期, 9世紀前葉からそれ以降の10例→14例という変遷が想定される。



第12図. 千歳市・札幌市における「8世紀後半~9世紀代」の土器群。

2) 茂漁・末広遺跡の斜格子・「X」字状紋土器と島嶼域資料の対比

茂漁8遺跡では、堅穴と近接あるいは後続する時期の土器群が包含層より検出されている。第13図の1例は、胴部下半に大きな斜格子紋を持つ「包含層」の資料である^(註7)。北大構内の2例と比べると、口頸部が短く、括れと外反の度合いが強い。横走沈線紋は太く鈍い凹線で引かれる。その下端には截痕が間欠的に施されている。斜格子紋と截痕は、ともに北大式に由来する要素と認められる。したがって、茂漁8遺跡の1例は土器系でなく、擦紋系の変容した個体と認められよう。型式学的にみるとその変遷は、「茂漁8遺跡(1)→北大構内(2)→末広遺跡(3・4)」の順に辿られる。

この編年をふまえて、茂漁8遺跡H-10号の覆土資料の位置を再び検討してみたい。先には「(3)類5例→(4)類6・7例」とし、後者とロクロ製須恵器(8)の関係を想定した。それでは、坏は両例のどちらに伴うのか。

6例の横走沈線紋は1例に酷似するので、時期的に近いと見做せる。他方、7例の横走沈線紋は間隔をあけて施されており、6例とは異なる。細い沈線を密接させる北大構内や末広遺跡の2～4例とも違っている。特に7例の口縁部は1・3・5例とは一致しないが、香深井1(A)遺跡の26例と良く似ている。したがって、7例は6例より新しいと考えられよう。このように観察すると、斜格子・「X」字状紋土器の変遷は、つぎのように捉えられる。

- (1) 茂漁8遺跡H-10号(5例)
- (2) 茂漁8遺跡H-5号覆土ほか(1例)←5例
- (3) 茂漁8遺跡H-10号(6例)≒須恵器(8)：8例
- (4) 北大構内(図書館地点堅穴)(2例)←1例
- (5) 末広遺跡IH30号(4例)←2例, (3例)
- (6) 茂漁8遺跡H-10号(7例)←4例

以上のとおり、例示した斜格子・「X」字状紋と参照資料は、札幌から千歳の範囲において、いずれも9世紀代に位置することが、あらためて確認されたと言えよう。

それでは島嶼域でも、こうした年代観が検証できるだろうか。島嶼域で検討したキメラ(折衷)土器によれば、9世紀代に接触・交流していた土器は、在地の刻紋土器

Aと元地1式、そして石狩低地帯の擦紋IIであった。

これら三者の関係性を端的に示すような、誂え向きのキメラ(折衷)土器は知られていない。キメラ(折衷)土器から読み取れるのは、刻紋土器Aと擦紋II、刻紋土器Aと元地1式の関係であり、また擦紋IIと元地1式との接触に伴う土器変容の姿であった。折衷的な土器の製作は、おそらく二者の間に限定され、三者が同時に係わるような事例は稀であったと推測される。しかし、三系統の土器群が同時代に存在するならば、遺跡内に何らかの物証が残されているであろう。幸い香深井5遺跡では、「刻紋土器A」・「元地1式」・「擦紋II」が同一層で出土している。それらの変遷は以下のように捉えられる。

- (1) 刻紋土器A(古)……………9, 22・23
- (2) 刻紋土器A(中)……………10・14・18 = 24
- (3) 刻紋土器A(新)……………11・15・19
- (4) 擦紋II(段状横走沈線紋)……………12・16・20
- (5) 擦紋II(横走沈線紋)……………26
- (6) 元地1式……………13・17・21・27

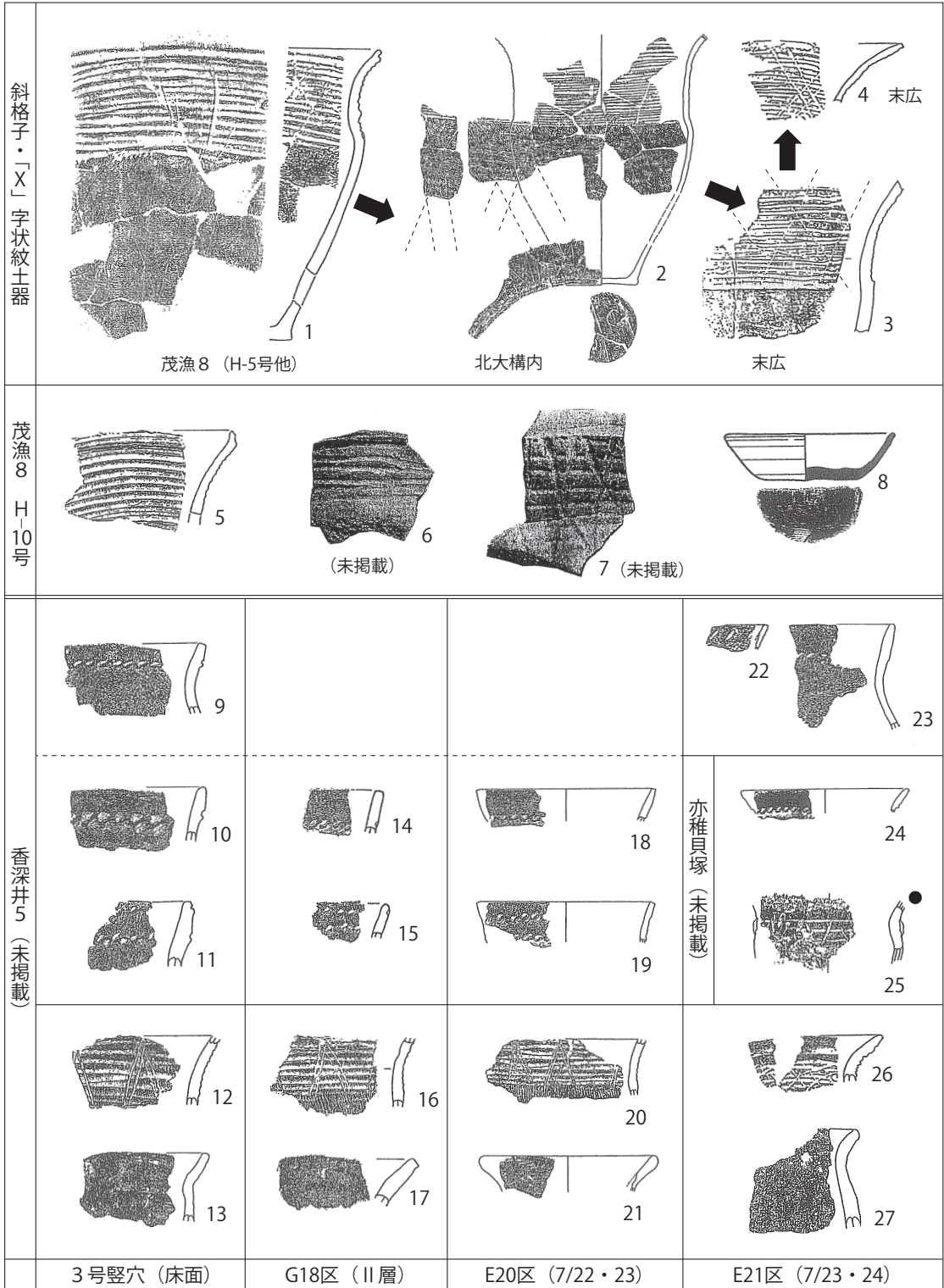
個々の資料について、今のところ細かく対比できないが、(1)～(6)類の土器群は層位的な出土状況からみて、緩やかな意味合いで時期的な「共伴」関係を示していると考えられる(柳澤, 2011: 348-354, 2013: 169-174)。

さて斜格子紋土器に戻り、(4)類と(5)類の位置を探りたい。12・16・20例の斜格子紋は2本沈線で鋭く描かれている。その特徴からみて、北大構内の2例・末広遺跡の4例よりは新しいと見做せる。他方、素紋の口端部を作出する26例は7例に近似し、斜格子紋の形状もより新しいと認められる(7例→26例)。また7例の斜格子紋は、末広遺跡の3・4例より太い描線でしっかり描かれている。口縁部の形状も、より新しいと見做せる。このような観察から、斜格子・「X」字状紋土器群では、

- 「1例→2例, →4例→12・16・20例→3例→7例→26例」

という序列が型式学的に想定される。

これを一つの試案としておき、新資料の増加を待つて見直したい。



第13図 石狩低地帯「斜格子・X字状紋土器」の変遷と島嶼域における「伴出・共伴」資料の対比。

6. 層位事実・火山灰による広域編年の検証

石狩低地帯では、しばしば10世紀前葉のB-Tmが堅穴の埋土から検出され、編年的な考察の手掛かりとされている。学史的には末広遺跡で最初に検出され、堅穴編年にも役立てられている(大谷・田村, 1982)。なお堅穴には稀ではあるが、新旧関係を示すものがある。それらを編年上の縦軸とし、茂漁遺跡と沼浦海水浴場遺跡の資料を用いて、道央-島嶼域編年の妥当性を確かめたい。

1) 末広遺跡における堅穴編年の検討

88軒に達する堅穴から膨大な量の土師器系の土器群(変容土師器)と少量の擦紋土器が出土している。それらを一覧すると、先に述べた土師器系の変遷(第9図15~22)とは別系統と思われる土器群が認められる。

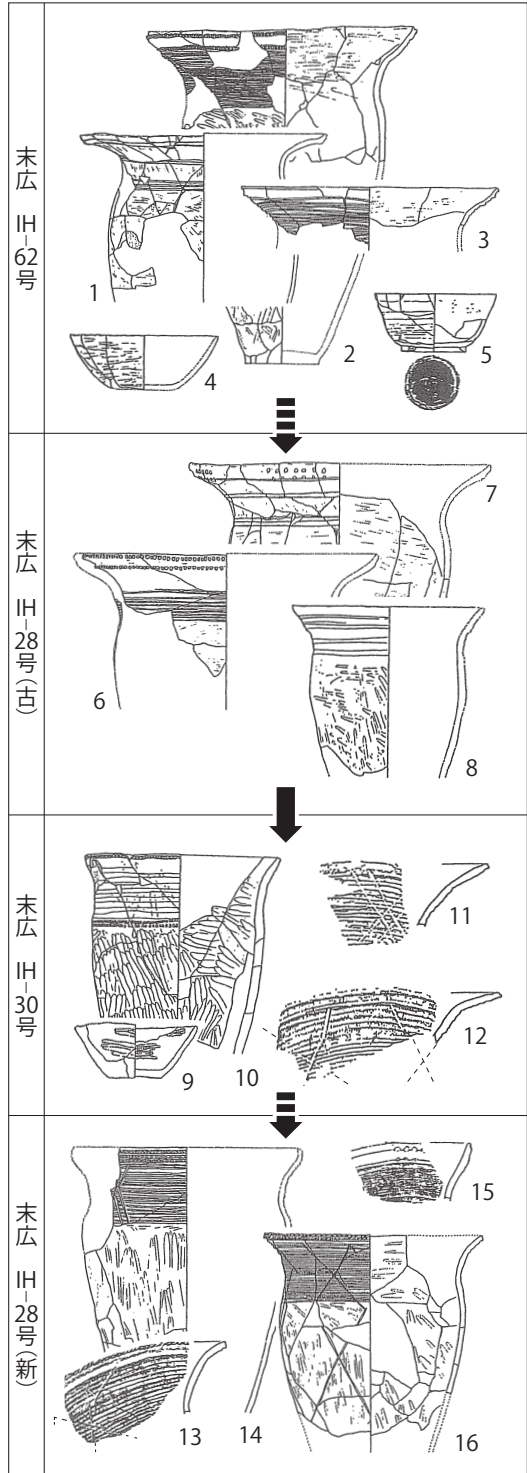
IH-62号の第14図1~5は、その代表的な例である。報告では「8世紀後半」の年代が与えられている(大谷・田村, 1982: 467-468)が、その後、「9世紀前葉」とする見解が示され、支持されている(鈴木, 1998: 337-229, 2007: 338, ほか)。ここでは鈴木氏の年代観に従いたい。

さて、IH-62号に後続する土器群は、IH-62号の北西に位置するIH-28号・IH-30号に纏まって出土している(6~16)。各堅穴の新旧関係は、「IH-30→IH-28←IH-38」と記載されている(大谷・田村 1982: 28)。しかし、本文の「排土」に関する記述によると、矢印は逆転し、「IH-30←IH-28→IH-38」と編年される。

この序列をふまえると、IH-62号(1~5:「9世紀前葉」)に後続する土器群は、つぎのように編年される。

- (1) IH-28号「古い部分」(6~8:カマド・煙道)
- (2) IH-30号「古い部分」(9・10:煙道・焚口)
- (3) IH-30号「新しい部分」(11・12:覆土)
- (4) IH-28号「新しい部分」(13~16:覆土)

(2)類に見える9例の「坏」は、誰もが9世紀代と認めるものであり、(4)類を10世紀代とする意見も存在しない。これらは間違いなく9世紀代と認めて良いであろう。ただし型式学的には、(1)・(2)類(「変容土師器」と(3)・(4)類(擦紋II)の間には、明瞭なヒアタスが認められる。系統的に接続しているとは考えにくい。主体となる土器系統の交代ないし融合が想定さ



第14図. 末広遺跡における堅穴資料の変遷。

れるように思われる。

IH-62号からIH-28号の「新しい部分」に至る資料を比べると、にわか横走沈線紋が細くなり、条数も増加し、「X」字状紋などが施される様子が観察される。これは外部からの強い影響に由来すると考えられる。

それに対して、口縁や口端を装飾する手法の流れは、それ自体は古式の擦紋土器に由来するものであるが、図示の資料ではIH-62号以来、連綿と続くようである。例えば2例から6=7例へ、そして北大式的な10例の刻点列を経て13・14・16例へと、刻み目の加飾が追跡できる。こうした流れは各時期の異系統土器との接触を反映していると思われるが、機会をあらためて検討したい。

以上、末広遺跡においても簡略ながら、土師器系列から擦紋IIを伴う段階への移行が確認され、斜格子紋や「X」字状紋の擦紋IIが9世紀の中葉以降に位置することが見通された。この編年観は島嶼域においても、矛盾なく成り立つであろうか。

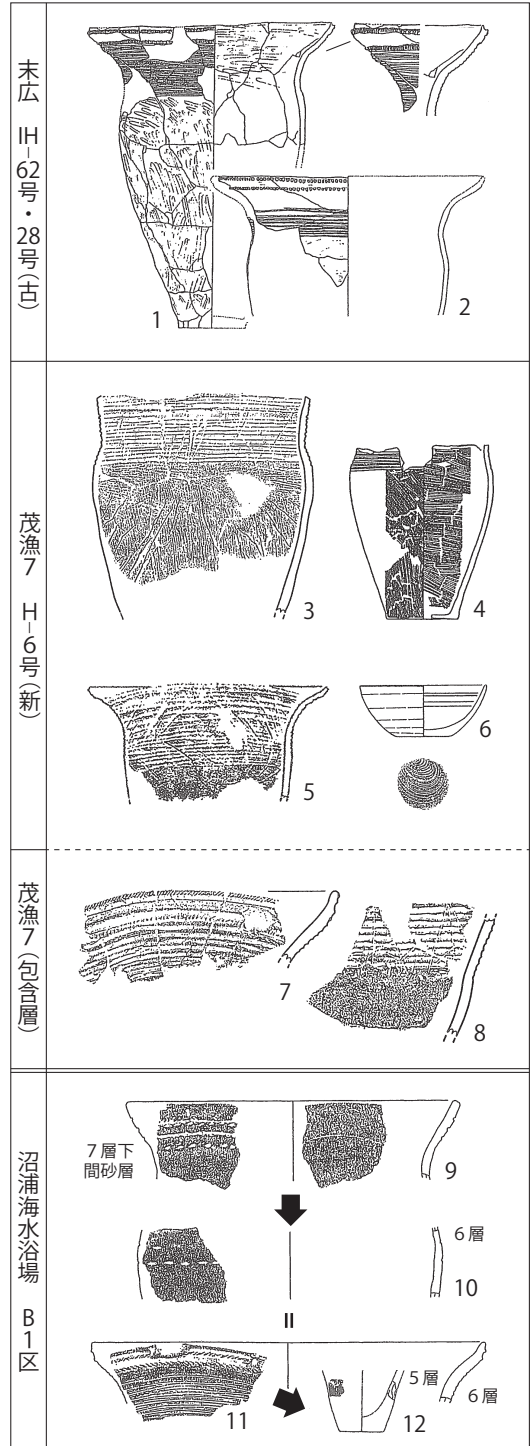
2) 石狩低地帯から利尻島の層位事実へ

末広遺跡で検討した変容土師器から擦紋土器を伴う段階への移行は資料に乏しいが、茂漁7遺跡でも観察される(第15図)。末広遺跡の(1)・(2)類(1, 2)に後続するのは、つぎのような土器群と考えられる。

- (1) H-6号(新)：新規のカマド1に伴う4例とそれに対比されるもの(3・5・6)
- (2) 包含層資料：7・8例

少し観察すると、3例には凹線状の横走沈線紋を切る直線的なモチーフが見える。擦紋IIに比定されよう。7・8例の横走沈線紋も凹線状を呈する。前者の口端部には、斜めの刻み目が上下に密接して施され、その間に2本の凹線が挿入される。後者には、細い沈線で幾何学的なモチーフが幅広く施される。これは末広遺跡IH-30号の一例(第13図4)に対比され、同時期のものと思われる。

先に引用した茂漁8遺跡の斜格子紋土器(第13図1)は、7・8例に先行する土器として注目される。その所見も念頭におくと、「1例→(茂漁8遺跡例)→7・8例≒3~6例」の順に変遷すると考えられる。いずれも9世紀代に比定されるが、後続する斜格子紋



第15図. 石狩低地帯の刻み目口縁部帯を持つ横走沈線紋土器と利尻島の新層位資料。

の変遷を考慮すると、その中頃に相当すると思われる。6例の糸切り底の坏からも、この想定年代に大きなずれは無いと言えよう。

さて以上のように、これまでの分析をふまえつつ、茂漁7遺跡の資料をあらためて編年すると、口端部に密接して刻み目を施す土器の変遷は、

(1) 末広遺跡 IH-62号1例→IH-28号(古:2例)

……「9世紀前葉」(鈴木, 1998; 2004)

(2) 茂漁7遺跡: 包含層の7例(=8例)

……9世紀中頃

という流れで捉えられる。他方、利尻島の沼浦海水浴場遺跡の第2次調査(礼文・利尻島遺跡調査の会編2017)では、(2)類7例に後続する資料(11)が、B1区において層位的に検出されている。その所見を示すと、つぎのように編年される。

(1) 7層下間砂層: 刻紋・沈線紋土器(1)類…(9)

(2) 6層: 刻紋・沈線紋土器(1)類～……(10)

: 擦紋Ⅲ(古)……(11)

(3) 5層: 元地2式(「古い部分」)……(12)

11例の内面は黒色処理され、口頸部の横走沈線紋は、細く鋭い沈線で密接に引かれており、末広遺跡の1例や茂漁7遺跡の7例とは異なる。口端部の刻み目も矢羽状に丁寧に施されており、両例よりも遙かに洗練された仕上がりを示している。また、刻み目帯の施紋部の位置も、1例・7例とは異なる。型式学的にみると、このように1・7例と11例の違いは明確に捉えられる。

通説では、刻紋・沈線紋土器を8世紀代(右代, 2003; 熊木, 2011, ほか)としているが、9～11例には、そのような古さの「擦文前期」土器は伴わない。刻紋・沈線紋土器の大半の年代は、刻紋土器Aと擦紋Ⅱの接触に伴う複数のキメラ(折衷)土器からみて、10世紀代前半に収まることは、沼浦海水浴場遺跡の新しい層位事実から見て疑いないと言えるであろう。

3) B-Tm 降下以前における道央・道南・島嶼域の広域編年

日本海に面する道南(奥尻島)から石狩湾を経て、道北の島嶼域を一望する地域の編年に関しては、旧著の中で原案を明らかにしている^(註8)。それを基にして作

成した新しい広域編年表(柳澤, 2015c: 第20図)では、B-Tm以後に位置する土器群を扱っている。そこで、本論の検討と旧稿(柳澤, 2015b: 442-523)をふまえて、B-Tm以前の土器群を整理すると、第16図のような編年図表が編成される。

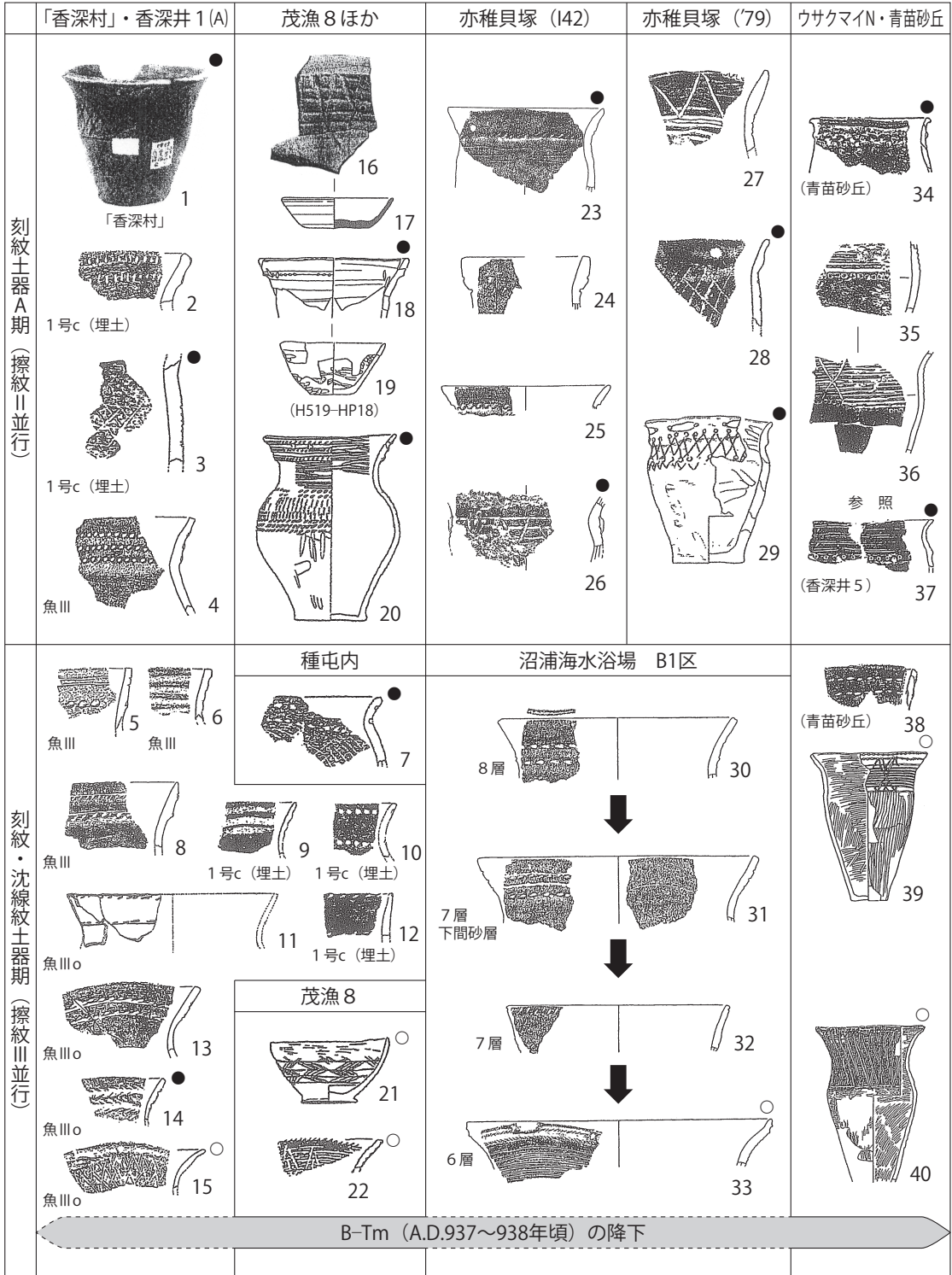
ここに掲載した資料は、いずれも10世紀前葉に比定されるB-Tmの降下以前に位置するもの(下段資料)、それらに先行するもの(上段資料)である。福沢等の研究によれば、B-TmはA.D.937～938年頃に比定されるという(福沢ほか, 1998)。これに従うと、刻紋土器Aと擦紋Ⅱ(16・35・36)、擦紋Ⅲ(15:「魚骨層Ⅲ₀」←13・14, 21・22, 33, 38, 39)は、刻紋・沈線紋土器(5～13, 30→38, 31・32)とともに、10世紀の前葉に位置すると認められる。他方、中央のラインより上位の土器群は、誰もが認める擦紋土器(Ⅱ: 35・36)と刻紋土器Aとの接触に由来するキメラ(折衷)・模倣土器(道央: 3・18^(註9)・20, 道南: 34, 島嶼域: 1・23・26・28・29・37)である。これら10例は、通説的な道央の「擦文前期」の年代観に照らしても、9世紀代(前葉頃)に位置づけられるものである。

そして沼浦海水浴場遺跡では、10世紀代に比定される刻紋・沈線紋土器(30, 31→13, 32→11・12)と擦紋Ⅲ(古: 33)が層位的に検出されている。こうした出土状況は、旧稿で述べた香深井1(A)遺跡の「魚骨層Ⅲ₀」をめぐる刻紋・沈線紋土器(1～2)類の13例と擦紋Ⅲの模倣土器14例、また刻紋・沈線紋土器(5)類と擦紋Ⅲ(5)類15例の伴出^(註10)が、まさに時期的な「共伴」であったことを、端的に証明していると言えよう。

おわりに

礼文・利尻の島嶼域と道央の石狩低地帯を往還する編年作業は、予想したとおり煩瑣な内容となった。続編では、行論の構成、論証の進め方がより簡潔、明快になるように心掛けたい。

亦稚貝塚には冒頭でも触れたように、第3ブロックの上層土器群、すなわち「オホーツク文化」の終焉に係わる年来の課題が残されている。また、島嶼域と道央の8世紀代における未知なる交渉関係についても、乏



○擦紋 III ●キメラ (折衷) 土器 / 模倣土器

第 16 図. 擦紋 II・III 期 (9 世紀中頃～10 世紀前葉) における道央・道南・島嶼域の広域編年.

しい資料を駆使して、できるかぎり交差編年の観点から検討を進めて行かなければならない。

室内と野外における新旧資料の発掘と発見を通じて、しだいに表題に掲げた目標への接近を図りたい。

謝辞

本稿で引用した亦稚貝塚の資料については、浜中2遺跡の5次調査後の2015年9月、2016年10月、2017年5月に利尻町立博物館において実査し、再整理したものである。資料の実査と調査情報の利用については、佐藤雅彦氏より格別なるご配慮とご教示をいただいた。また、茂漁7・8遺跡資料の実査(2013年3月)では、恵庭市教育委員会の長町章弘氏と郷土資料館の上屋真一氏にお世話をいただいた。なお本稿の校正については、長山明弘氏の手を煩わせた。末筆ながら皆様にお礼を申し上げます。

註

- (1) なお、調査成果を纏めた第4章では、各ブロックの「土器セット」は、「亦稚I→亦稚II→亦稚III」の順に変遷するとされ、標本例として2・5例と6～8例、11・16例、24・25例と27～29例が提示されている(岡田・梶田・西谷ほか、1978:107-108・図版19-21)。「亦稚I」の突き瘤紋土器と刻紋土器Aが時期的に共伴するかどうか、その点には疑問があるように思われる。筆者は、旧稿で一つの解釈案を示し(柳澤、2006b:65-68)、その後修正を加え、問題の坏が突き瘤紋土器に伴う可能性を指摘している(柳澤、2008a:526-529)。
- (2) 「香深村」のキメラ(折衷)土器の紋様描線に関して、前稿(柳澤、2017)の記述には誤りがあり、また校正のミスもあった。以下のように訂正しておきたい。
 1. 48頁左17～19行:
正「左斜線→右斜線」(2描線)の順に描いて、その下を直線で閉じる(3描線)。
 2. 55頁右26行:元地1式→元地2式
- (3) 青苗砂丘遺跡の本例は、B-Tmより下層から出土している。報告書(皆川・越田、2003)で

は、浮線状の装飾をソーメン紋と見做し、ウサクマイN遺跡のソーメン紋土器に対比している。しかし、第4図4例の口縁部装飾は香深井I(A)遺跡の5例(刻紋土器A)に酷似しており(柳澤、2008a:584-590)、頸部の円形スタンプ紋は、元地1式から借用・転写されたものと考えられる(大場、1968:35-写真2右土上例を参照)。4例と8例は、ともに同時代の所産であり、キメラ(折衷)土器と認められる。

- (4) 亦稚貝塚I区の出土土器は、遺物台帳の登録コードI41～I45まで、目下準備中の『沼浦海水浴場遺跡第2次発掘調査報告書(「附篇」)』において、網羅的に拓本・実測図を収録する予定である。1～11例は、それから引用したものである。
- (5) 4例の右側破片は、登録番号:RTMHarc3624中より、他の3点の資料(I42)とともに抽出した。左側破片と2例や18例などは多量のRTMHarc3627中から発見した。なお右側破片には、未掲載のトレース原図が存在する。
- (6) 試掘調査の資料袋には、他に未注記の資料があると書かれているものがあつた。これは確認できていない。実査の機会があれば所見を見直したい。
- (7) 本例1はH-5号の他、H-4・7・12号の覆土やD16・E17の区包含層において検出されている。この範囲に堅穴より新しい時期の資料が廃棄されていると考えられる。他の堅穴周辺でも同様の状況が認められる。
- (8) 柳澤、2008a:630・第22表、2011:368・第7表、2012b:183・第1表、2015b:516・第16表の編年表、並びに本文の記述を参照されたい。
- (9) K519遺跡18例(=19)については、柳澤(2014a:11-12、2015b)を、またキメラ(折衷)土器の広域編年については、柳澤(2014a:4-7、2014b・2015b:117-142)などを参照されたい。
- (10) 擦紋III(古)式の15例は「魚骨層III₀」から出土したとされている(大井・大場、1976:503-504)。しかしながら、未発表資料の悉皆的な実査によると、15例は刻紋・沈線紋土器(5)類に伴うと考えられる(柳澤、2014a:200-203)。

引用・参考文献 (五十音順)

- 天野哲也, 1982. オホーツク文化の展開と地域性. 大井晴男編, シンポジウム オホーツク文化の諸問題: 83-92. 学生社.
- 石井淳, 2006. H519 遺跡. 札幌市文化財調査報告 80. 2分冊. 札幌市教育委員会. 348pp.
- 出穂雅実, 2001. K39 遺跡 第7次調査. 札幌市文化財調査報告 66. 札幌市教育委員会. 272pp.
- 上野秀一・仙波伸久, 1993. K435 遺跡. 札幌市文化財調査報告 17. 札幌市教育委員会. 393pp.
- 右代啓視, 1991. オホーツク文化の年代学的諸問題. 北海道開拓記念館研究年報, (19): 39-43.
- 右代啓視, 2003. オホーツク文化の土器・石器・骨角器. 野村崇・宇田川洋編, 新北海道の古代 2: 134-150. 北海道新聞社.
- 宇田川洋, 1980. 擦文文化. 野村崇・菊池俊彦編, 北海道考古学講座: 151-182. みやま書房.
- 内山真澄・熊木俊朗・藤沢隆史, 2000. 香深井 5 遺跡発掘調査報告書 (2). 礼文町教育委員会. 258pp.
- 宇部則保, 2009. 香深井 1 遺跡の土師器について. 北海道考古学, (45): 67-74.
- 宇部則保, 2011. 蝦夷社会の須恵受容と地域性. 小口雅史編, 海峡と古代蝦夷: 187-235. 高志書院.
- 大井晴男, 1972. 礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について. 北方文化研究, (6): 1-36.
- 大井晴男, 2004. アイヌ前史の研究. 吉川弘文館. 960pp.
- 大井晴男・大場利夫ほか, 1976・1981. 香深井遺跡 (上・下). 東京大学出版会.
- 大川清, 1998. 北海二島一礼文・利尻島の考古資料(手控・拓図) 一. 窯業史博物館. 69・61pp.
- 大谷敏三・田村俊之・西連寺健, 1981. 末広遺跡における考古学的調査 (上). 千歳市教育委員会. 155pp.
- 大谷敏三・田村俊之, 1982. 末広遺跡における考古学的調査 (下). 千歳市教育委員会. 501pp.
- 大場利夫, 1968. 北海道周辺に見られるオホーツク文化Ⅱ礼文島・利尻島. 北方文化研究, (3): 1-44.
- 岡田淳子, 1984. 特集によせて. 考古学ジャーナル, (235): 2-4.
- 岡田淳子・梶田光明・西谷榮二ほか, 1978. 亦稚貝塚. 利尻町教育委員会. 141pp.
- 岡田淳子・宮宏明編, 2000. 大川遺跡における考古学的調査Ⅰ. 余市町教育委員会. 468pp.
- 小野裕子, 1998. 利尻島亦稚貝塚と礼文島香深井 A 遺跡の時間的な関係について. 野村崇先生還暦記念論集編集委員会編, 北方の考古学: 野村崇先生還暦記念論集: 349-365. 野村崇先生還暦記念論集刊行会.
- 小野裕子, 2000. 擦文期の北大構内遺跡群. 小泉格・林謙作編, 北大構内の遺跡 11: 62-67. 北海道大学.
- 北風一憲, 1978. 表面採集の土器. 岡田・梶田・西谷ほか, 亦稚貝塚: 71-77. 利尻町教育委員会.
- 熊木俊朗, 2000. 香深井 5 遺跡の変遷と居住パターンに関する問題. 香深井 5 遺跡出土「元地式」土器について. 礼文町教育委員会編, 香深井 5 遺跡発掘調査報告書 (2): 151-167. 礼文町教育委員会.
- 熊木俊朗, 2011. オホーツク土器と擦文土器の出会い. 今村啓爾編, 異系統土器の出会い: 175-197. 同成社.
- 河野広道, 1933. オホーツク式土器群. 犀川会編, 北海道原始文化聚英, 59・71pp. 民族工芸研究会.
- 小杉康・高倉純・守屋豊人編, 2012. 北大構内の遺跡 19: 116-161. 北海道大学埋蔵文化財調査室.
- 榊田朋広, 2011. 擦文時代前半壜形土器の型式学的研究—統縄文/擦文変動期研究のための基礎的検討 2. 日本考古学, (32): 33-57.
- 佐藤和夫・土肥研晶, 2010. 恵庭市西島松 2 遺跡. 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 265 (1分冊). 340pp.
- 佐藤達夫, 1972. 擦紋土器の変遷について. 東京大学文学部考古学研究室編, 常呂: 462-487. 東京大学文学部.
- 札幌市埋蔵文化財センター編, 1993. K435 遺跡. 札幌市文化財調査報告 42. 札幌市教育委員会. 488+234pp.
- 札幌市埋蔵文化財センター編, 2006. K523 遺跡. 札幌市文化財調査報告 81. 7, 239pp.
- 鈴木信, 1998. 土坑墓等出土の土器. 北海道埋蔵文化財センター編, 千歳市ユカンボシ C15 遺跡 (2):

- 337-339. 北海道埋蔵文化財センター.
- 鈴木信, 2007. アイヌ文化の成立過程—物質交換と文化変容の相関を視点として—. 天野哲也・小野裕子編, 古代蝦夷からアイヌへ: 352-390. 吉川弘文館.
- 種市幸生・田中哲郎ほか, 2001. ウサクマイN 遺跡. 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 156. 北海道埋蔵文化財センター. 340pp.
- 千葉大学文学部考古学研究室編, 2012. 北海道礼文町浜中2遺跡第1次発掘調査概報. 同研究室. 45pp.
- 千葉大学文学部考古学研究室編, 2013. 北海道礼文町浜中2遺跡第2次発掘調査概報. 同研究室. 131pp.
- 千葉大学文学部考古学研究室編, 2014. 北海道礼文町浜中2遺跡第3次発掘調査概報. 同研究室. 146pp.
- 千葉大学文学部考古学研究室編, 2015. 北海道礼文町浜中2遺跡第4次発掘調査概報. 同研究室. 180pp.
- 千葉大学文学部考古学研究室編, 2016. 北海道礼文町浜中2遺跡第5次発掘調査概報. 同研究室. 70pp.
- 塚本浩司, 2007. 石狩低地帯における擦文文化の成立過程について. 天野哲也・小野裕子編, 古代蝦夷からアイヌへ: 67-189. 吉川弘文館.
- 中田裕香, 2004. オホーツク文化・擦文文化の土器. 大沼忠春編, 考古資料大観 11 (続縄文・オホーツク・擦文): 132・135・165-179. 小学館.
- 野月寿彦・石井淳, 2008. K528 遺跡. 札幌市文化財調査報告 86. 札幌市教育委員会
- 福沢仁之・塚本すみ子・塚本齊・池田まゆみ・岡村真・松岡裕美, 1998. 年縞堆積物を用いた白頭山—苫小牧火山灰 (B-Tm) の降灰年代の推定—. Lagun (汽水研究), (5): 55-62.
- 藤井誠二, 2001. K39 遺跡第6次調査. 札幌市埋蔵文化財センター編, 札幌市文化財調査報告 65: 1-5 分冊. 札幌市教育委員会.
- 前田潮・西谷榮治, 1997. 利尻町種内遺跡発掘調査報告. 利尻研究, (16): 29-59.
- 松谷純一・上屋真一, 1988. 中島松6・7遺跡. 恵庭市教育委員会. 357pp.
- 皆川洋一・越田賢一郎, 2003. 奥尻町青苗砂丘遺跡2. 北海道立埋蔵文化財センター. 105pp.
- 森秀之, 2004. 茂漁7遺跡・茂漁8遺跡. 北海道恵庭市発掘調査報告書. 恵庭市教育委員会. 180pp.
- 八木光則, 2010. 古代蝦夷社会の成立. 同成社. 288pp.
- 柳澤清一, 2000. 南千島から利尻島へ—道東編年と道北編年の対比—. 東邦考古, (24): 12-37.
- 柳澤清一, 2006a. 道北における北方編年の再検討. 古代, (119): 79-122.
- 柳澤清一, 2006b. 北海道島・南千島における北大式～擦紋IV期の広域編年. 人文研究, (35): 43-115.
- 柳澤清一, 2007. 北方島嶼の先史考古学. 北海道大学総合博物館ニュース, (15): 11-13.
- 柳澤清一, 2008a. 北方考古学の新天地—北海道島・環オホーツク海域における編年体系の見直し—. 六一書房. 651pp.
- 柳澤清一, 2008b. 道北・道央から見た環オホーツク海域編年の予察. 先史考古学研究, (11): 119-165.
- 柳澤清一, 2009a. 擦紋II期における道央・道北. サハリン島南部編年の対比. 人文研究, (38): 99-140.
- 柳澤清一, 2009b. 新しい青苗砂丘遺跡編年と北方古代史研究. 古代, (122): 79-121.
- 柳澤清一, 2010. 擦紋III期における環宗谷海峡編年検討. 菊池徹夫編, 比較考古学の新天地: 784-794. 同成社.
- 柳澤清一, 2011. 北方考古学の展開. 六一書房. 387pp.
- 柳澤清一, 2012a. いわゆる「元地式」(「接触様式」)編年の再検討. 古代, (128): 113-160.
- 柳澤清一, 2012b. 新北方編年案とB-Tm火山灰から見た蕨手刀の副葬年代. 古代, (126): 151-189.
- 柳澤清一, 2013. 礼文島浜中2遺跡(1990年度)調査資料の編年. 古代, (131): 143-184.
- 柳澤清一, 2014a. 香深井1(A)遺跡における「オホーツク式」年代観の改訂. 千葉大学大学院人文社会科学部研究科編, 千葉大学大学院人文社会科学部研究科プロジェクト研究報告書 276: 193-234. 千葉大学大学院人文社会科学部研究科.

- 柳澤清一, 2014b. 擦紋II・III期における通説「道東」編年の検証. 人文研究, (43): 25-90.
- 柳澤清一, 2015a. 道北(島嶼域)「北方編年」における年代観の改訂—浜中2遺跡出土の須恵器片をめぐって—. 千葉大学考古学研究室考古学論攷II. 六一書房. 50pp.
- 柳澤清一, 2015b. 北方考古学の新潮流—「逆転編年」説の検証と「オホーツク文化」年代観の改訂—. 六一書房. 626pp.
- 柳澤清一, 2015c. 水禽・「鱈」状モチーフから見た「貼付紋系土器」の広域編年. 古代, (137): 105-139.
- 柳澤清一, 2017. 礼文・利尻島編年の新検討—その(1) 香深井5遺跡を中心として—. 利尻研究, (36): 47-71.
- 山谷文人, 2011. 利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書II. 利尻富士町教育委員会. 354pp.
- 礼文・利尻島遺跡調査の会編, 2017. 北海道利尻富士町沼浦海水浴場遺跡. 第一次発掘調査報告書. 礼文・利尻島遺跡調査の会. 151pp.

図版出典

- 第1図. 1:岡田・梶田・西谷ほか(1978), 1':小野(1998).
- 第2図. 1~29:岡田・梶田・西谷ほか(1978).
- 第3図. 1:岡田・梶田・西谷ほか(1978), 1':筆者撮影, 2~7・14・15:大井・大場ほか(1976・1981), 8~11:種市・田中(2001), 12・13:大谷・田村(1982), 16:内山・熊木・藤沢(2000), 17:筆者作成, 18~21:大場(1968).
- 第4図. 1~3:岡田・梶田・西谷ほか(1978), 4:皆川・越田(2003), 5:大井・大場ほか(1976), 6~8'(大場1968).
- 第5図. 1~3:大場(1968), 4・5:大井・大場ほか(1976), 6~17:野月・石井(2008), 2'・18~21・23・24:筆者作成, 22:内山・熊木・藤沢(2000).
- 第6図. 1~12:岡田・梶田・西谷ほか(1978).
- 第7図. 1~11:筆者作成, 12・15~22:岡田・梶田・西谷ほか(1978), 13・14:大井・大場ほか(1976).
- 第8図. 1~17:大井・大場ほか(1976).
- 第9図. 1:筆者撮影, 2:筆者作成, 3:山谷(2011), 4~8:大井・大場ほか(1976), 9~13:塚本(2007)より転載, 14~16:上野・仙波(1993), 17~19・20~22:佐藤・土肥(2010), 23・24:藤井(2001).
- 第10図. 1・2・9・12:森(2004), 3~8・10・11:筆者撮影.
- 第11図. 1~5:筆者撮影・作成, 6:森(2004).
- 第12図. 1~9:佐藤・土肥(2010), 10~13:小杉・高倉・守屋ほか(2012), 14~16:大谷・田村(1982).
- 第13図. 1・5・8:森(2004), 2:小杉・高倉・守屋ほか(2012), 3・4:大谷・田村・西連寺(1981), 6・7:筆者撮影, 9~27:筆者作成.
- 第14図. 1~8・13~16:大谷・田村・西連寺(1981), 9~12:大谷・田村(1982).
- 第15図. 1・2:大谷・田村(1982), 3~8:森(2004), 9~12:礼文・利尻島遺跡調査の会編(2017).
- 第16図. 1:河野(1933), 佐藤・土肥(2010) 2~6・8~15:大井・大場ほか(1976), 7:前田・西谷(1997), 16:筆者撮影, 17・20・21・22:森(2004), 18・19:石井(2006), 23~26:筆者作成, 27~29:岡田・梶田・西谷ほか(1978), 30~33:礼文・利尻島遺跡調査の会編(2017), 34・38:皆川・越田(2003) 35・36・39・40:種市・田中ほか(2001), 37:内山・熊木・藤沢(2000).